

1	S
9 8 7 6 5 4 3 2 1	C
<p style="text-align: right;">2002年春 渋谷 (午後4時頃)</p> <p>ハチ公前交差点。 待っている人ごみの中に、 ラジカセとマイクを持った 制服姿の少女。</p> <p>信号が変わり一斉に歩き始 める人々。</p>	画面
	音声

			1
1 3	1 2	1 1	1 0
	人の群れに飲み込まれそう になりながら、センター街 を頼りなげに歩いて行く。		雑踏の音、歩く少女。
アイ(OFF) 私、路上ライブ1000回するけん。	母(OFF) 「歌手を目指して10年も 頑張ったっちゃないね。アイ。 あきらめるとはいつでも出来るっちゃけん、 もうイツペン、もう少し頑張ってみらんね。」	母(OFF) 「イツペンかニヘンでくじけてどうするかね。 九州女の意地やろうもん。 福岡では、アイの名前も 少しは知られた存在じゃないね。 絶対、誰か認めてくれる人が現れるって。」	アイ(OFF) 「ねえ、母さん、路上で歌ってみたけど、 やっぱイカンやった。誰も聞いてくれんと。 もう東京やらスカン。 歌手になんかなれんでもいい。」

2					1					
5	4	3	2	1	1 9	1 8	1 7	1 6	1 5	1 4
<p>熱心に講演する社長。</p> <p>講演する社長</p> <p>ビジネス交流会看板。</p> <p>学生カンファランス</p> <p>とあるビル。T・U</p> <p>(欠番)</p> <p>天候、雨。</p>					<p>タイトル</p>					
<p>社長</p> <p>「IT、ITとみんな言いますが、その本質はロコミなんです。ロコミの中心は女性、ティーンが握っている。」</p>					<p>母(OFF)</p> <p>「福岡に、アイの帰るところはないっちゃんね。それでダメやったら歌手あきらめる。」</p> <p>その位の決意で頑張るとよ！」</p>					

3	2
3 2 1	9 8 7 6
<p>雨の中へと飛び出すアイ。 決心するアイ。 やまないと思い、 ザーッと雨が降る渋谷の街</p>	<p>ボードに記入しつつ、 つづけて</p> <p>言って頭を下げる社長。 石田、壇上が上がって、 石田の話の中、社長、 辞して</p> <p>中井、マイクを上げ、 会の終了を告げる。</p>
	<p>社長（背）「私はそう考えるのです。」 次のヒット商品を生み出す鍵になる、」</p> <p>ASE 拍手V</p> <p>石田 「秋葉社長でした。 僕ら学生も日頃から社長にはお世話になり、 ビジネスのノウハウを教わっているんですが、 今日のお話も勉強になりました。」</p> <p>中井 「これで、今日の異業種交流会は終了です。 長時間、お疲れ様でした。」</p>

										7	6	5	4	3					
										8	7	6	5	4	3	2	1 B	1 A	4
																			地下街入口へとやってきて、階段を降りるアイ。
																			地下街を歩く人たち。 用意するアイ。 ラジカセのスイッチを押し、立ち上がり動作。
																			（欠番） 前髪の中から水が落ちる。 マイク I N。 深呼吸して決意の表情に！ チラリとアイの方を見るが通り過ぎる人。 社長達、階段からおりてくる。
																			Λ S E カチツ V アイ 「アイです。歌手を目指して福岡から来ました。」 アイ（OFF） 『天使たちのメロデー』、聞いて下さい。」

	7	6	5	4
	1 7	1 6	1 5	1 4
				1 3
				1 2
				1 1
				1 0
				9
柱の奥にアイが見える。				
(社長目線)				
奥に一人の少女を見つける				
視線、声のする方へ				
社長、何かに気づき				
社長達、柱2本分位は通過。				
アイ歌う。				
いるが、やはり通り過ぎる。				
チラリとアイを見る人は				
まだアイには気づかない。				
社長達、奥から歩いてくる。				
涙ひとつ知るたびに 忘れてゆく				
大事なこと				
この東京(まち)にはじきとばされ				
歩き方を				
覚えてく				
目を閉じたら				
きつとどんな				
未来もかなうのに				
目を開けた現実にもいつも				
なにも出来ない私なの				
天使たちの鼻歌よ				
どうかメロデー				
運んできてよ				
この足じゃもう小さすぎて				
足跡				

	7	6	5	4
	2 4	2 3 b	2 3 a	2 2
	2 1	2 0	1 9	1 8
2人。 社長の所に戻ってきた	アイ T. U	O. L	社長 T. U	社長の所へ戻る。
				リと見る。2人少し話して、
				来ようとしなない社長をチラ
				アイ歌う。
				でいってしまおう。
				た事に気づくが、先に進ん
				中井と石田、社長が止まっ
				その場に立ち止まる。
				社長の足 I N。
				さえ残せないのね
				人は
				夢を持つ
				からね
				諦めたりするのですか？
				そこはホントはガラスの世界
				壊せるのはこの手かも
				私が
				地球（ここ）に生まれた
				ホントの意味はなに：
				絶望のとなりにはいつでも
				希望がいたり
				するでしょう

									7	6	5	4
4	4	4	—	3	3	3	3		2	2	2	2
2	1	0		3	2	1	0		9	8	7	6
<p>3人でアイを見る。 通行人が一人立ち止まる。 ぼろぼろと立ち止まり始める通行人達。</p>												
<p>落書きにつめこんだ夢は この場所でも覚えているの かなわないものはないとそう 今も少し信じているの 空に浮かんだ一つの星は 輝く明日を 待ち望んで こわれたからを少しずつ破って 今朝日浴びて散る</p>												
<p>W・O (欠番) 社長の拍手でイメージ開ける。 一番強い拍手をする社長。 社長は目を潤ませている。</p>												
<p>^ S E 拍手 v</p>												

							7	6	5	4
5 6	5 5	5 4	5 3	5 2	5 1	5 0				4 9
手にした名刺。	おそる手に取り見るアイ。	差し出された名刺をおそる	取り出し、名刺を差し出す。	胸もとより名刺ケースを	石田に耳打ちする社長。					アイ、後ずさりしながら
			石田	社長	アイ	中井	アイ	中井	アイ	アイ
										「すみません。歌手になりたくて、福岡から上京して歌ってるんです。」
										「歌は君がつくったの？」
										「はい…。」
										「声もいいし、曲もよかったけど、地下街じゃ歌いにくいでしょ？」
										「いつもは放送局前で歌ってます。雨になったんで…。」
										「おい、名刺渡せよ。」
										「あ、はい。」
										「あ、あのー僕たちこういう者です。」

8	8	7	6	5	4
3	2	1	6	5	4
大きな家の前、笑っている	アイのアパート。 ジワT. B (欠番)	社長、再びアイが去った方 を見る。	照れつつ	石田、一人でボソツと	
		社長	社長	石田	石田
		「…。」	「ばかやろう！ 俺だってマッチ売りの少女に感動した ガキの頃があったんだ。」	「社長とマッチ売りの少女なんて。」	「あれ、社長、泣いてるんですか？」 「心が洗われるような歌だったなあ。 なんか、マッチ売りの少女を思い出したんだ。」 「えっありえない。」

9			
2 1	6	5	4
翌日夕方 (欠番) とあるビル	写真2つ。 キーボード ベッドの上で座っている アイ。携帯電話で話をして いる。		
	アイ (OFF) 「若い二人はちょっと 頼り無さそうやったけど、 ← (ON) もう一人の人は社長て呼ばれよつたし、 ちゃんとしとうみたいやった。」 母 (OFF) 「東京はこわい人も多いて言うよ。 ばってん名刺ばくれたとなら イッペン電話してみたらどうね？ 音楽関係の人、知つとうかもしれんし。」 アイ 「うん、わかった。それより、母さん、 身体、無理したらいかんけんね。」 母 (OFF) 「アイもね、ちゃんど野菜ば食べないかんよ。」 アイ 「うん。」		

						9
						3
						4
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6
						5
						6
						3
						6

10	9					
2 1	18	17	16	15	14	13
同入口、信号待ちの人々や 手前ビルに鳥 渋谷、109	きよとんとする瀬尾。 ああとうなずく中井。	瀬尾に向かつて 石田、中井に向かつて 電話を切り			田島、受話器をわたす。 やって来る石田。	
	瀬尾 中井	石田	石田	石田	石田	瀬尾
	「社長？ マッチ売りの少女？」 「ああ。」	「中井、昨日のことみんなに説明しておいてくれよ。 社長にさあ、マッチ売りの少女連れてくるって 言っておいてくれ。」	「109の前、あーじゃそこで待ってて、 すぐ行きますから。」	「はいい、石田です。 ええ、ええ、ええ…あつ、ああ、ああ… 昨日の彼女ですね。今、どこですか？」		「えつ、石田に彼女？信じられん。」

1 1	1 0
5 4 3 2 1	4 3
<p>自慢ぼく 少しえらそうとか</p> <p>指さす石田。 下手から上手へPAN。 交差点。 プレート。 ^神南小学校下Vの信号</p>	<p>他の人々、アイの姿がポツ ンとある。 制服で待っているアイ。 手前を通り過ぎる人。 アイの所へと走って来る石 田と泉。 頭を下げるアイ。かるく紹 介しあう泉とアイ。</p>
<p>石田 アイ 石田</p> <p>「もう少しだからね。」 「カンファランスって何をしてるんですか？」 「ああ。学生が会社を立ち上げようとして 活動してるんだ。」</p>	

				1 2	1 1
				1 2	6
				事務所 扉 開けて石田 入ってくるアイ。 石田、アイをメンバーに 紹介する身振り。 立ち上がる社長。	
				他のメンバーも立ち上がり。石田、扉を閉め	
				瀬尾、社長を紹介するよう な手ぶりで	
				瀬尾 「社長はマーケティングの分野では 有名人なんだよ。」	
				石田 「これがカンファランスの主力メンバー。 この事務所は社長の会社のもので、 僕はタダで使わせてもらってるの。」	
				石田 「みんな、アイちゃんです。」	
				石田 「さあ、どうぞ。」	
				石田 (OFF) 「あそここの階段を上ったところなんだ。」	
				社長 「いやあ、よく連絡してくれたね。」	
				アイ (OFF) 「はい。」	
				ASE ガタガタガタ… (一同が立ち上がる音) v	

					1 2
9	8	7 B		7 A	6
	田島のり出し	(欠番)	アイ、石田の方を見る	座るアイ その後ろを石田、小走りで I N O U T	社長歩いて行き、アイへ だまって促す泉。 アイ O U T。 頷き合う泉と石田。 ラスト、石田、泉の後ろを 通って自分の席の方へ
アイ	田島		ASE		社長
「宇田川学院の2年です。」	「制服着てるけど、高校生？」		ガタガタガタ… (他の人達が座る音) v		「こんなところでゴマすってどうすんだ。 それより君の話を聞かなきゃ。」
					社長 (OFF) 「まあ、そこにかけて。」
					アイ 「はい。」
					泉 「さあ…。」

							1 2
							1 0
							1 1
							1 3
							1 4
							アイ少しうつむき
社長	アイ	瀬尾	アイ	田島	木村	中井	
「父さんは福岡？歌手になるのには賛成してんの？」	「福岡でいろんなコンクールで優勝して、CDも出したんです…。でも、全然売れなくて。」	「それがどうして東京で、しかも路上で歌ってるわけ。」	「母さんが歌が好きで、小さい時から福岡にある音楽教室で歌とピアノを習ってました。」	「作曲とか勉強してるんだ。」	「中井はカンファランスの中では、一番音楽にくわしいんだよ。」	「アイちゃんは声がとってもいいし、歌ってる曲もいいんだ。」	
	「私もそれでもよかったけど、母さんがもっと大きな歌手にならなきゃダメだつて…。」						

1 3	1 2
3 2 1	1 8 1 7 1 6 1 5
<p>《回想》</p> <p>2000年12月31日</p> <p>福岡の小さなアパート</p> <p>テレビを見ている母と娘</p> <p>父の遺影、木箱の中の</p> <p>7つ程のトロフィー</p>	<p>さびしそうにうつむく</p>
<p>(BGM TVから流れてくる『蛍の光』)</p> <p>アナウンサー「さまざまな出来事があった20世紀もまもなく終わろうとしています。新しい年2001年、そして21世紀が、平和と希望に満ちた世紀に</p>	<p>アイ</p> <p>「父さんは私が10歳の時死にました。母さんが働くようになって無理をしてしまい、今は体を悪くして…。」</p> <p>社長</p> <p>「それは…大変だったね。東京は母さんと出て来たの？」</p> <p>アイ</p> <p>「いえ、私一人で東京へ…。」</p> <p>本物の歌手を目指すようになって、母さんが言って、言い争いになって…。」</p> <p>中学3年の大晦日の夜に―。」</p>

				1 3
7	6	5	4	
		ごまかし笑いつつ	うつむき アイを見る	
(背) コンクールの審査員の先生のツテで		母 (ON) 「アイ、そのことやけど、高校は東京に行かんね。宇田川学院ていうところが芸能コースがあるげな。 住むところも昔の知り合いに、心当たりのあるし。音楽事務所もね、	母 「もうすぐ21世紀になるっちなね。 母さんには実感のなかー。ばってんアイ、あんたも紅白に出られるような歌手にならなよ！」	なりますように。それでは、20世紀最後の紅白、みなさんご一緒に”蛍の光”でお別れしましょう。」

						1 3
1 3	1 2		1 1	1 0	9	8
番組が流れている。	テレビは21世紀を告げる			顔をふせ		
アイ	アイ	母	アイ	母	アイ	
「母さん・・・。」	「私はもう決めとつと。アイは東京に行くと！」	「アイ、ちゃんと聞いて。歌手になるとは、母さんとアイの夢やったとよ。21世紀やないね。若いあんたが羽ばたかんでどうすると？」	「私、東京はスカーン。ボイストレーニングで東京に行くたんびに、スカンごとなる。」	「アイ、あなたの歌は特別やないね。あんたは福岡で埋もれるような娘やないとよ。」	「母さん、待つてよ。東京やら行けるわけないやない。母さん身体弱いし、お金もないやない。」	「大手の会社でめんどう見てくれるけんて：。」

					1 4
					1 2 3 4 5
					シーンとなっている 事務所
					顔を上げ 一回うつむき
					社長 「そんなことがあったのか。」 中井 「音楽事務所はどうしたの？」 アイ 「一年いたけど、何もなくて、首になったんです。」 瀬尾 (OFF) 「ええー。」 泉 (OFF) 「ひどい！」 アイ 「オーディションにも何度か行ったけど、 通 <small>とお</small> つても契約料が高くて…。」 田島 「コンビニでアルバイトもしているんですが…。」 中井 「事務所によっては契約料、 それも結構高額をとるところもあるんだ。」 石田 「それでストリートミュージシャンに なったのか。」

1 5				1 4
2 1	1 4		1 3	1 2
教室内、漢文の授業中。	宇田川学院外観。	頭を下げるアイ。	社長、泉を見て アイを見て	社長、一同を見て 社長、泉を見て 社長を見る石田。
	アイ 泉 社長 泉 社長 一同 社長 瀬尾 石田 アイ	「ありがとうございます。」 「私は熊本なの。お隣同士だもんね。」 「この人に相談するといい。」	「ええ。」 「アイちゃん、個人的なことなんか、」 「それから泉は九州出身だよな。」 「はい。」	何かサポートしてあげられると思うよ。」 「はい、すみません。」 「社長、とりあえず路上ライブを盛り上げましょう。」 「それ俺得意よ。」 「大学でもイベントで人を集めてるし。」 「じゃ明日から手分けしてサポートしてあげな。」

1 7	1 6	1 5
2 1	2 1	5 4 3
放送局前の路上でアイがラ (欠番)	アイが働いている コンビニ(夜) ニッコリ笑顔でコンビニ袋 を差し出すアイ。	黒板に漢詩。 初老の先生が書いている。 一心にノートに詩を書いて いるアイ。 教科書にかくしたノートに 書かれる「旅立ちの日に」 の一文。 一心にノートに詩を書くア イ。 少し顔を上げ考えたり
	アイ 「ありがとうございました。」	

1 8	1 7
3 2 1	4 3
<p> 渋谷駅前 歌をうたっているアイ。 仲間達が手伝っている。 観客の中、看板を持っている 石田。泉、手メガホンで 呼びこみ。 </p>	<p> ジカセで歌っている。 アイの横にいる石田と中 井。瀬尾と原口が手でビラ をくばり、道行く人に呼び かけている。 (木村、田島もいる。) (欠番) 立ち止まって歌を聞きはじ める人がポツリポツリとふ える。 </p>

2 2	2 1	2 0	1 9	1 8
2 1				1 3 — 8 7 6 5 4
机の方を見やる泉。 アイのアパート(夜)	(欠番)	(欠番)	(欠番)	(欠番) 通行人に呼びかける瀬尾。 ビラをくばる田島。 中井、原口がビラをわたす。 歌うアイ。 アイを囲む輪が広がっている。
泉 アイ(ON) 「本当にアイちゃんはラーメンが好きなんだね。」 ← あっ…				

						2 2
1 5	1 4	1 3		1 2	1 1	1 0
アイ、唇をふるわせて そつと目を閉じる。	写真の父UP。	アイを見つめる泉。	向いたまま	アイの目にうつすら涙、 こぼれないように上を	人。アイ、仰いで	アイ、思い出をさぐる ように
アイ	アイ(OFF)	泉	アイ	アイ	泉(背)	アイ(OFF)
「それから、人の思いやりに素直に 感謝できる人になりなさいって…。」	「父さんにはね、思いやりのある娘に なりなさいっていつも言われてた。」	「そう…。」	「困ったときはお互いさまって言いながら、 母さんと荷物つくつてたなあ…。」	「寝具とか衣類とか山ほど送ったの。」	「お父さんて、そういう人だったんだ…。」	「荷物ねえ、神戸の大震災のとき、 父さんが送ったもの。」
		これが入院前の最後の写真に なったんだもの…。」	母さんと荷物つくつてたなあ…。」	「困ったときはお互いさまって言いながら、 母さんと荷物つくつてたなあ…。」	「寝具とか衣類とか山ほど送ったの。」	「荷物ねえ、神戸の大震災のとき、 父さんが送ったもの。」

					2 3					2 2				
5		4		3	2	1				2 0	1 9	1 8	1 7	1 6
		アイを見る中井			雨の中の事務所 頭の後ろに腕を組み、 雨を見ている瀬尾					(欠番) 微笑んで頷くアイ。	(欠番) 優しい表情で見る泉。	(欠番)		
中井	泉	中井		石田	瀬尾					アイ	泉			
	「ああ、それとミキサーとアンプも。」	「スピーカーがいますでしょ？」	「ああ、それとミキサーとアンプも。」	「ああ、それとミキサーとアンプも。」	「もう梅雨に入ったのかなあ。 ったく、うっとうしいよな。」	「アイちゃんのサポートだけど、 夏までにちゃんとしたスタイルをつくろうぜ、 今のままじゃダメだ。」	「キーボードがあるんだから、 弾き語りのスタイルにしよう。」	「ああ、それとミキサーとアンプも。」	「ああ、それとミキサーとアンプも。」	「うん…。」	「お父さんの教えのこもった写真なんだね。」			

2 4	2 3
3 2 1	1 9 1 8 1 7 1 6
<p>アイのアパート（夜） タクシーゆるゆると OUT 空になった カップヌードル。 ベッドにもたれて（体育座 り）ケイタイで話している アイ。（部屋着）</p>	<p>扉を開け、パンをくわえた 社長が顔を出す。 え！？と見る一同 一瞬の間があり、 ドーン！と笑い出す一同。 キョトンとする社長。</p>
<p>← （ON） 路上ライブばサポートしてくれよう。 ← アイ（OFF）「みんないい人だよ、」 ← SE ブルブル…</p>	<p>社長 「ん？」 瀬尾 「そうだ、社長だ！」 石田 「その通り！」 社長 「何？社長が何だつて？」 何だ、俺の顔、そんなにイケてる？」</p>

2 5	2 4
2 1	6 5 4
<p>(欠番)</p> <p>学校外観</p>	<p>床にキーボード。にこやかな表情で、キーボードへ何気に手をのばす。</p> <p>何気ないかんじで鍵盤を打つ</p> <p>ラスト親指おいて止まる</p> <p>アイ、心配そうに</p> <p>母の言葉に両手をあてて</p> <p>心配のあまり少し語調きつくなつて</p>
<p>女生徒① (OFF) 「アイ、事務所やめたんだって?」</p> <p>^SE チャイム^ ^SE ガヤ^</p>	<p>機材も、社長さんが少しずつそろえてやるて。」</p> <p>^SE ポロン♪^</p> <p>^SE ポロン…♪ポロン…♪♪^</p> <p>母 (OFF) 「よかったねえ。だけん言うたろう? あんたの歌は人の心を打つと。社長さんやら学生さん達にお礼せないかね。」</p> <p>アイ 「そげなこと心配せんでいいと。それより身体の方はどげん?」</p> <p>母 (OFF) 「この前、ちよつと入院したけど、もう心配せんでよか。」</p> <p>アイ 「母さん、私のことより自分のことば考えてね。お願いやけん——。」</p>

2 6	2 5
3 2 1	5 4 3
<p>音楽雑誌。ステレオ。 ギター。</p> <p>部屋の隅に立てかけられた</p> <p>そこそこ大きな家。</p> <p>中井の家（夕方）</p>	<p>アイ肩をすくめて</p> <p>アイ、悪びれず</p> <p>見合う2人に？のアイ</p> <p>2人、アイに向いて</p> <p>心配げに</p> <p>頷く女生徒①</p> <p>アイ、思わぬ言葉に</p> <p>首をかしげつつ不安げに</p>
	<p>アイ</p> <p>「私、正式契約じゃなかったし、仕事もなさそうだから…。」</p> <p>女生徒②</p> <p>「ねえ、渋谷でストリートミュージシャンやってるんだって？ほんとなの？」</p> <p>アイ</p> <p>「うん、ほんとだよ。」</p> <p>2人</p> <p>「……。」</p> <p>女生徒②</p> <p>「制服でやってるって噂になってるよ。学校に知れたらヤバイよ。」</p> <p>アイ</p> <p>「……そうかなあ…いけないことなのかなあ…。」</p>

					2 7					2 6											
6		5		4		3		2		1		8		7		6		5		4	
<p>事務所（夜） 準備作業の一同。</p> <p>床に広げた紙に書いている 石田。</p> <p>ふり向く原口。</p> <p>ニコリと頷く石田。</p> <p>中井の方へ</p> <p>中井、頭をさすりつつ</p>										<p>ヘッドフォンを耳にあて、 歌を歌うアイ。</p> <p>ミキサーを使う中井。</p> <p>ミキサーを操作する中井。</p> <p>アイを見る。</p> <p>歌を歌っているアイ</p> <p>T・B↓F・O</p>											
<p>中井</p> <p>石田</p> <p>原口</p> <p>石田</p>										<p>瀬尾</p> <p>中井</p> <p>「えっ。」</p> <p>「それだ。」</p> <p>「原口、CDの方はどうだ。」</p> <p>「すごく時間がかかるけど、順調には進んでるよ。」</p> <p>「ああ。中井、配線の方は大丈夫そうか。」</p> <p>「僕もこんなのは初めてだよ。」</p>											

2 8	2 7		
2 1	9	8	7
<p>明け方 渋谷の街 机の上、インスタント</p>	<p>看板UP 瀬尾、IN。 中井、のり出して</p>	<p>石田、声の方に向く。</p>	<p>中井もガツクリ。 石田、そつか…という感じ。 瀬尾、作業していたものを ポイツと箱に入れ 額に手をやる。</p>
	<p>(OFF) 俺、そんなにヘタかなあ。」</p> <p>石田 (背) 「そうかなあ、</p> <p>中井 (背) 「どれ？」</p>	<p>泉 「ちよつとその看板ひどくない！ アイちゃんがかわいそうだよ。」</p> <p>石田 「おお？」</p> <p>泉 (OFF) 「石田くん、」</p>	<p>石田 「はあ。」</p> <p>瀬尾 「はあ。まいった、まいった。 俺もバンドでもやつときやよかった。」</p>

29	28			
1	6	5	4	3
<p>薄暗い室内 朝の光がやわらかく差し込む。眠りこける学生たち。</p>	<p>ラーメンのカップ、缶コーヒーやボトル。床の上に寝る男達。原口はパソコン前でつつぷしてる。イスをベットにして寝ている泉。パソコンの横に積まれたCD。19枚完成のはりがみ。台車におかれている荷物。スピーカー、キーボード、マイクなど。</p>			

3 1	3 0	2 9
4 3 2 1	2 1	2
<p>箱からCDを出して 配線をしている石田。 洪音へ集まる人々。 洪音、集まる人々。</p>	<p>沈黙考。 ゆつくりと窓の方へ向き、 厳しい表情のぞかせて ゆつくりと腰掛ける。 ため息まじりに深く背をあ ずける。</p>	<p>戸口に立つ社長。 半ば唾然の社長、ため息混 じりに肩を軽くすくめて、 気持ちを多少残しつつドア の向こうへ消える。</p>

3 1										
2 1	2 0	1 9	1 8	1 7		1 6	1 5	1 4	1 3	
<p>置かれるマイクスタンド。 中井、マイクを調整しつつ 石田、にこやかに 中井、アイへ向いて</p> <p>アイ、力強く 来るアイ、中井に少しよけて、スカートたたんで座ると、少し緊張の面持ちでマイクを調整。 見守る一同。 準備を整えて アイ、マイクに声をあててみるも反応しない。 え！？となる中井 アイ、マイクを確かめて、</p>										
アイ	中井	アイ					アイ	中井	石田	ASE カタ…v
「マイクちよつと変！」	「あれ、おかしい。」	「あー、あー。」					「はい。」	「じゃあ準備OKだ。 アイちゃん、一回リハやってみよう。」	「ああ！」	「石田、ジェネレーターいい？」

	3 1	<p>しゃべってみたり、 軽くたたいてみたり。 前へ出る中井。 アンプに駆け寄る石田。 混乱している一同。 石田、アンプを調べて、 たたいたり傾けたり、 コードを確かめたり。 立ち上がりつつ石田</p>	<p>アイ 「あー。」</p> <p>中井 「声が出てないよ。 スピーカーも音出てないんじゃない？」</p> <p>石田 「あつやっぱおかしい。 お前どうして音出さないんだ。 おいこら、音出せ！」</p> <p>石田 「あー…やっぱだめだなあ。」</p> <p>瀬尾 「発電機？電圧が弱いとか…。」</p> <p>泉 「やっぱり配線でしょう。」</p> <p>中井 「どうする、石田？」</p> <p>石田 「はあー…マイクもキーボードもだめじゃ、 しょうがないな。 アイちゃん、残念ながら、今日は中止にしよう。 チェックして出直した。」</p>		
2 6	2 2	2 5	2 4	2 3	2 2
<p>頭をかいてため息まじりに アイへ</p> <p>中井、心配げに 石田、すまなそうに</p>					

3 2	3 1
1	3 3 3 3 2 5 4 3 2 8 7
<p>事務所内。 社長、アイ、石田、中井、 瀬尾、泉、原口。</p>	<p>仕方ないと心得て俯くアイ (欠番) 台車を押すアイ。後方に 同じく瀬尾。 渋音。アイINして立ち 止まる。 決意のアイ。台車を押し出 してOUT。</p>
<p>中井 瀬尾</p> <p>「いやあ、まいったよ。ギターアンプを キーボードにつけたんだもんなあ。」 「気づかなかったなあ。」</p>	<p>アイ 「はい、わかりました。」</p>

3 3	3 2					
2 1	1 8	—	1 2	1 1	1 0	9
<p>学校 ゆつくりと流れる雲。 学校の屋上。数人の生徒達</p>	<p>フツと目を閉じる</p> <p>顔を上げる</p> <p>ボソッとクレヨンしんちゃん風。</p> <p>(欠番)</p>					
		<p>石田</p> <p>社長</p> <p>石田</p> <p>「すごい変りようです！」</p> <p>「維新の立役者の坂本竜馬は『日本を洗濯したい』って言ってたそうだが、アイの歌をもっと多くの人に聞いてもらって、日本人の心をもっともっときれいにするんだ。」</p> <p>「社長の言うことはいつも大きい。」</p>				

				3 3
	6	5	4	3
				<p>がたむろっている。</p> <p>奥に、携帯で話している</p> <p>アイ。</p> <p>不安な表情、携帯で話す</p> <p>アイ。</p> <p>アイ。</p>
				<p>担当者（OFF） 「はあ？コンサートってうちのホールですか？」</p> <p>アイ 「はい。そちらでコンサートをするにはどうしたらよいのかお聞きしたくてお電話しました。」</p> <p>担当者（OFF） 「いきなりそんなこと言っても無理ですよ。実績のあるアーティストでないと、うちでは無理です。」</p> <p>アイ 「私、渋谷駅前や放送局前で歌ってるんです。どうしても渋谷音楽ホールで歌いたくって…。お願いします！」</p> <p>担当者（OFF） 「無理と言ったら無理です。電話切りますよ。」</p> <p>アイ 「あつ、待ってください！」</p>

								3 4	
8	7	6	5	4	3	2	1		7
<p>何か言いつつ、ケーブルを マイクを調整するアイ。 構える。 笑顔になる社長。デジカメ 作業する一同。 なり、立ち止まる。 カゲから出てきて、歩みに 駆けてくる社長IN。 荷物運ぶ。 石田、瀬尾、奥に原口、 機材を運ぶアイ、中井、泉 渋谷駅前ひろば(16時頃)</p>								<p>電話の音がプープーと なる。 手を下ろし、深くため息を つく。</p>	
<p>観客(OFF)「あそこ、前もやってるの見たよ。」 観客(OFF)「へへ、高校生なんだって。」</p>								<p>ASE プープー プープーV アイ (ため息)</p>	

						3 4
1 5	1 4	1 3	1 2	1 1	1 0	9
<p>中井に渡す瀬尾。 ジェネレーターのスーターを引っ張る原口。 テーブルにCDをおく泉。 音の確認をする石田とアイ 大丈夫そうだと見合う 2人。 社長、撮り終えてニコリ。 足取り軽く、前へOUT。 数人の人がアイの前に集 まっている。 行き交う人もまだいる。</p>						
<p>観客（OFF）「ねえ、ここでやっててヤバくない？」 観客（OFF）「ヤバくない。」</p> <p>アイ 「アイです。いつも聞いてくれてありがとう。 今日からこんなすごい機材で歌えることにな りました。 天使たちのメロディー、聞いてください。」</p>						

					3 5				
					3 4				
5	4	3	2	1	2 0	1 9	1 8	1 7	1 6
吐き捨てるように 外の方を見やったりし 木村、イライラと腕組み。 入口の方を見る。 田島もうんざりした様子。 頬杖の手、テーブルをたた くように下ろす。					キーボードを弾くアイの手 路上、立ち止まる人達。 (欠番) (欠番)				
田島 「うーん…。」					木村 「今日、カンファランスのMTGだっていうのに、 何で誰も来ないんだよ！」				
田島 「もう30分以上待っているけれど、 来ないわね。」					木村 「どうせアイちゃんのライブだろ。 ったく、アイちゃんを応援するのはいいけれど、 カンファランスはどうするつもりなんだよ！」				

3 7	3 6	3 6	
1	3	2 1	6
<p>頭を下げるアイ。 歌を歌い終わり、立ち上がり</p>	<p>言いつつOUT。 気づきあつて いった感じ。 若い方、ヤレヤレですねと</p>	<p>ハチ公 ハチ公前交番前 2人の警官が道をたずねる 人に説明している。 女、ああ分かったといった 感じで。男、早く行こうぜ とばかりに歩き出す。</p>	<p>ため息をつく2人。</p>
<p>観客(OFF)「超感動したー！」 アイ(OFF)「ありがとうございました。」</p>	<p>警官 「歌またやってるな。あそこではダメだ。 あいつら何度言ったらわかるんだ！ ちよつと行ってくるから、あとを頼むよ。」</p>	<p>^BGM 「ガラスの心」v</p>	<p>二人 「はあー…。」</p>

							3 7
							2 3 4 5 6 7 8 9
							<p>(欠番)</p> <p>CDを買いに並ぶ人々。</p> <p>人々の行列の整理する社長</p> <p>ボードを持って整理する</p> <p>石田。</p> <p>アイ、サインをして渡す。</p> <p>男、何か声をかけてOUT</p> <p>声をかける瀬尾。</p> <p>警官INしてくる。</p> <p>並ぶ客に注意する。</p> <p>バラける人々。</p> <p>呼びかけていた石田、ブツ</p> <p>ブツ言って去る人に気づき</p> <p>向こうに目、?と見て、</p>
							<p>観客 (OFF) 「すつごくよかった。」</p> <p>観客 (OFF) 「アイちゃん！最高！」</p> <p>社長 「一列にならんで。」</p> <p>石田 「ちゃんと並んでくださいね。」</p> <p>アイ 「ありがとうございます。」</p> <p>男 「がんばってね。」</p> <p>瀬尾 「ありがとうございました。」</p> <p>観客 (OFF) 「CDください。」</p> <p>警官 「通行人のじゃまです。早く歩いて下さい。」</p> <p>通行人 (OFF) 「なんだよ…。」</p> <p>石田 「はあー？」</p>

3 8	3 7
4 3 2 1	1 3 1 2 1 1 1 0
<p>音楽ホール・雨 (欠番) ポツンと立つアイ。 見つめるアイ。 表情固めで(身体も)。</p>	<p>ヤバイ!という顔。 INする警官。 石田、愛想笑いで頭を下げ る。 やって来る社長も一緒に謝 る。 それを見ている一同。 不安顔。 肩を落とす瀬尾。 心配げなアイ。</p>
	<p>警官 「ここではダメって言ったでしょ。 何度言ったらわかるの!」 石田 「すみません。すぐ解散しますから。」 社長 「すみません。」</p>

						3 8
1 0		9	8	7	6	5
傘を少しふって、アイに	館長、扉閉めて	おくれてアイも	担当者。	気づいて入口に目をやる	担当者。	OUT。 事務所の扉。 中に作業する人々。 大きな声で 頭を下げるアイ。 ！！となる担当者。
担当者（OFF）「お帰りなさい。」	担当者 「あつ、館長。」	担当者（背） 「電話でも言ったでしょう。悪いけど路上で歌ってるぐらいではどうても無理ですよ。お引取りください。」	担当者（背） 「お願いします！」	アイ	アイ（OFF）「私、どうしてもこのホールでコンサートを開きたいんです！」	

	4 0	3 9	3 8
3	2 1	2 1	2 1
	<p>店員OUT。 同内の一同。 某ファミレス</p>	<p>緑いっぱいの街路樹 (欠番)</p>	<p>頭を下げる。 アイOUT。 見つめる館長。担当者、首 をもみつつ、さつさと中へ 入ってゆく。 (欠番)</p>
田島	<p>女① 女② 木村</p>		<p>^S E ドア開閉V</p>
	<p>「へえくそうなの。」 「でしょー？信じらんない。」 「カンフアランスはどうなってんだ。 アイちゃんのサポートばかりで、 企業の起ち上げや異業種交流会の予定も まったく立っていないだろう。」</p>		
	<p>「正直言つて今の事務所」</p>		

		4 0	
5		4	
カット尻、木村、瀬尾の方 に向く。		正面の石田。 顔を上げてボソボソと。 語調強くなって	
木村（背） 「中井は元々音楽やってたんだから それもありだろ。 ← 瀬尾はどうなんだ？」		木村 「石田さあ、本気で音楽やるのか？ アイちゃんのサポートして、 アイちゃん本当に歌手になれるの？」	
		石田 「いやあ、俺も正直いつてわかんない。 でも、今はあの娘の夢を信じて、 サポートしてあげたいんだ。」	
		中井 「僕はアイちゃんをサポートしながら 音楽の事業を起ちあげればいいと 思ってるんだ。」	

	40
<p data-bbox="1299 557 1337 624">瀬尾</p> <p data-bbox="896 557 935 846">コップとる木村の手</p> <p data-bbox="831 557 869 763">IN—OUT。</p> <p data-bbox="762 557 801 909">水を飲むと、イライラと</p> <p data-bbox="628 557 667 891">少し強くコップをおく。</p> <p data-bbox="563 557 601 826">シーンとなる一同。</p> <p data-bbox="496 557 534 763">気まずい空気。</p> <p data-bbox="427 557 466 891">泉、ポツリと語りだす。</p>	6
<p data-bbox="1299 1010 1337 1077">瀬尾</p> <p data-bbox="1230 1229 1337 1854">「俺は音楽に特別興味があるわけじゃないし、音楽業界が厳しいってことも聞いている。ただ、アイちゃんの歌聞いて、あの娘のサポートしてると何か周りが動いていく。そこに興味が出てきたんだ。」</p> <p data-bbox="962 1010 1000 1666">木村（OFF）「何のんきなこと言ってるんだ。」</p> <p data-bbox="762 1010 801 1599">木村 「4年生はもつと真剣だよ。就職だって本格的に探さなきゃならないしな。」</p> <p data-bbox="628 1010 667 1211">ASE カツV</p> <p data-bbox="563 1010 601 1330">一同 「……。」</p> <p data-bbox="427 1010 466 1877">泉 「私だって、就職だめなら熊本に帰らなければならぬし、人ごとじゃないよ。」</p> <p data-bbox="293 1234 331 1312">でも、</p> <p data-bbox="240 1234 279 1267">←</p>	8

					4 0
1 4	1 3	1 2	1 1	1 0	9
ムツと聞いている木村。	聞いている中井、田島。	一同へ訴える。	石田、田島へ	田島	田島ナメ泉
	瀬尾 (OFF) 「歌のうまい人はいくらでもいる。でも、アイちゃんのように自分の才能を伸ばす努力をし続けている娘は少ないって。」	瀬尾 「社長が言ってたよ。」	石田 「今それを言っちゃだめなんだよ。アイちゃんは1000回ライブを目指している。ただひたむきにね。その姿がみんなの心を打つんだよ！」	田島 「路上で歌がうまいっていつでも、歌手になれるわけじゃないでしょ！」	アイちゃん一生懸命だし、歌もとってもいいと思うの。私は今は何も考えないで、アイちゃんのサポートをしていく！」

					40
		19	18	17	16 15
田島、立ち上がり、 そこへ田島、一同見て 一同、目で追う。 O U Tする木村。 言いつつO U T気味。 一同をグルリと見て 					領く泉。 瀬尾 しばし間あって 立ち上がる木村。 見る一同。
田島 石田 木村 木村 一同 瀬尾					社長はかなり本気でアイちゃんの歌を 広めようと考え始めている。」 「俺はそこに興味があるんだ。」 「……。」 「わかった。」 「俺は別の道を行くしかないな。」 今のカンファランスを 疑問に思ってる連中も多いつてこと 覚えておいてくれ！」 （こぼし） 「あっ…。」 「私もうカンファランスには来ない。 別にアイちゃんが嫌いってわけじゃないけど。」

									4 1	
1 0	9	8	7	6	5	4	3	2	1	2 0
人ゴミに館長の姿。	歌うアイ。	いる館長。	アイの歌に心惹かれて	歌うアイ。	(欠番)	人だかりができています。	館長、アイの歌を聞いている。	同、UP。	歌うアイ。	渋谷、ハチ公像。
暗闇の中	浮かべてみたの	そつとメロデー	終わりに吹く風	運んできたよ 今日の日	いま、メロデー	場所へと	天使たちがこの	天使たちがこの	メロデー	天使たちのメロデー
										瀬尾 (OFF) 「あーあ、田島も行っちゃったよ…。」
										俯いてため息。 2人の去った方を見る泉。 立つ泉。 プイッとOUT。

4 1						
2 6	2 5	2 4	2 3	2 2	2 1	
去る客、OUT。	握手するアイ。	館長IN。	残り一人となった客。	渋谷の風景。	ニコリと頷く中井。	と原口。原口の言葉に
観客(背)	アイ			石田	男	
「がんばって。」	「よろしくお願いします。」			「ありがとうございます。」	「がんばってね。」	
						片付けをしている中井
						色紙を受け取るアイ。
						次の人と入れかわる。
						声をかける男。
						わたして、両手で握手。
						泉、手にCD。
						サインしているアイ。
						アイ、サインをしたところ

		4 2	4 1
3	2	1	2 9 2 8 2 7
<p>熱心に話す館長。</p> <p>手をやって頷く中井。</p> <p>見合う2人。アイの肩に</p> <p>中井も少し驚いている。</p> <p>キョトンとしているアイ。</p> <p>OUT。</p> <p>店員おじぎして奥へ</p> <p>店内、話すアイたち。</p> <p>OUTするトラックの腹</p>	<p>人の気配に気づいて</p> <p>INする館長。</p> <p>アイ、頭下げて</p> <p>館長、微笑んで</p> <p>キョトンとするアイ。</p>	<p>泉</p> <p>「ありがとうございます。」</p> <p>アイ</p> <p>「あつ、館長さん！」</p> <p>アイ(背)</p> <p>「すみません。」</p> <p>館長</p> <p>「いや、通りかかったんで…。</p> <p>歌、聞かせてもらいました。</p> <p>よかったら、少し時間をもらえますか？」</p> <p>アイ</p> <p>「あ…はい…。」</p>	<p>ASE</p> <p>ブロロロロ…v</p>

						4 4	
1 2	1 1	1 0	9	8	7	6	
ボードなめ一同。	泉ナメ瀬尾。 るアイ。	微笑ましく見てクスリとやるアイ。	頭をかく石田。 泉の言葉に頷く社長。	泉、にこりと	石田ナメ社長 ため息まじりに	石田、身を起こして	
中井（背）	中井（OFF）	瀬尾	アイ	石田	泉	社長（OFF）	
「2000名集めて15曲ぐらい	「そうなんだ。」	「でも…一年後っていつても、時間ないよね。」	「フフツ…。」	「あは、まいったなあ、泉にそういわれちゃあ。」	「天は味方をする！ 石田くん、意味がわからなくっちゃ、 天から見放されるよ。」	「ぼかやろう。」 「今時の大学生の学力はどうなってるんだ。 ゆとり教育の影響なのか？」 「自分で道を切り開こうと努力した者だけに、 俺たちの理解を超えてる。」	石田 「えっ？（クレヨンしんちゃん風に） ああー意味不明…。社長の言うことは

4 5	4 4
2 1	2 0 — 1 5 1 4 1 3
<p>アイの下宿そば（夜） （欠番） 買い物の荷物を持って 歩いて来るアイ</p>	<p>アイ、中井へ 社長、みんなへ 向く石田と瀬尾 社長、前に手をついて やる気のアイ、頷く （欠番）</p>
<p>アイ 「母さん、すごいことになったとよ。 私、渋谷音楽ホールで 来年コンサートすることになった。」</p>	<p>歌うんだからなあ。大変なことだよ。」 アイ 「曲の方は、私、頑張っつてつくります！」 社長 「本格的なCDの制作ができるようになったし、 あとは路上で知り合ったマスコミや 音楽関係者にもっと積極的に アイをアピールしていこう。」 石田（OFF） 「わかりました。」 泉（OFF） 「がんばろう！」</p>

4 5					
8	7	6	5	4	3
<p style="text-align: right;">笑顔のアイ</p> <p style="text-align: right;">外灯の明かりの下、 立ち止まるアイの足。 話すアイ。</p> <p style="text-align: right;">夜空なぞ見上げて</p> <p style="text-align: right;">狭い空。 月も星も見えない。 外灯下のアイ</p> <p style="text-align: right;">電話に目をむけるアイ。</p>					
<p style="text-align: right;">母（OFF）「えつ、本当！本当ね！おめでどう、 やっぱしあんたの歌は特別やったとよ。 母さん、ホントにうれしかア。」</p> <p style="text-align: right;">アイ 「それでね、社長さんがね、 今までよう頑張ったし、 これからも大変やけて、 夏休みとってイッペン福岡に帰っておいでて。」</p> <p style="text-align: right;">母（OFF）「なーんか夢のごたあねえ。 ね、アイ、大観覧車の出来たとよ。それに乗ろう。 それに豪華客船も予約しとくけん。 博多湾の上で夕涼みばしよう。」</p> <p style="text-align: right;">アイ 「母さん、無理したらイカン。私、母さんの 病気見舞いも兼ねて行くっちゃけんね！。」</p>					

4 8	4 7 4 7
2 1	3 2 1
<p>(夜) P M 8時くらい 福岡のアパート アパート(内) キッチン。 小さいテーブルにぎっしりと並べられた夕食。 アイのはしがINしてきて、 一個の餃子をつまむ。</p>	<p>イヤホーンを耳に入れる。 逆の耳にもイヤホーンを入れる。音楽が流れ始めてリラックスするアイ。 (間) 窓の外に目をやる。 (欠番) 走り行くアイを乗せたバス。</p>
<p>アイ 「母さんの餃子、やっぱりおいしかア。」</p>	

			4 8
6	5	4	3
<p>安心させるように</p> <p>アイ、表情が少しくもる</p> <p>ちよつと乗り出す</p>			<p>おいしそうに食べるアイを、ニコニコ見ている母。</p> <p>アイ、最後の餃子に手をのばしながらセリフ</p> <p>母はお茶をすする。</p> <p>アイ、モグモグ食べている。</p> <p>母、ゆつくりと湯飲みをおろし、</p>
<p>母 「この不況やけんねえ。ばってん父さんのお陰で今も仕事ば出してくれるところもあるとよ。」</p> <p>アイ 「母さん、本当に無理せんかね。CDも売れようけん、社長さんが来月から給料を出してくれるって…。」</p>			<p>母 「父さんも好きやったもんね。」</p> <p>アイ 「そう言えば、会社も大変なんやろ？」</p>

4 8		
9	8	7
<p>アイもにつこりを3の形に</p>	<p>の所へ行く。</p> <p>左手で扉を閉めて、シンクの所へ行く。</p> <p>スイカの入った皿を出し、かがめる母。</p> <p>中の物を取るため体をかがめる母。</p> <p>冷蔵庫を開ける母。</p> <p>イスから立ち上がり、</p>	<p>母 「社長さんにはね、近かったらすぐにもお札に行くのにね。」</p> <p>母 「当たり前やないね。一番前の席で応援するけん、予約しとつてよ。」</p> <p>福岡から300人ぐらいお客連れて行くけんね。」</p>

4 9	4 8
2 1	1 3 1 2 1 1 1 0
<p>マリノアシティ(昼) 観覧車の近く 人ゴミの中をアイが小走り でフレームIN。母に「早く 早く」と手招きする 福岡市街(パノラマ) アイ達の乗ったゴンドラが 上がってくる。</p>	<p>向きを写真の方へ ジャーの横の父の写真 UP。</p> <p>笑顔で頷くアイ</p>
<p>アイ(背) 「うわあ、</p> <p>アイ 「早く早く！」</p>	<p>アイ 「お父さんもいっしょにね。」 (こぼし)</p> <p>母 「アイ、明日はさあ。久し振りに外に出て、 思い切つきり楽しもう。」</p> <p>母(OFF)「ね、そうしよう！」</p> <p>アイ 「うん。」</p>

							4 9
							4 3
							<p>ゴンドラ(内)</p> <p>母、アイの方へ近寄って来る。乗り出して</p> <p>アイ、母の目線の方を見る</p>
							<p>博多中が見えるねえ。」</p> <p>アイ 「すごかア。」</p> <p>母 「ほら、あの辺やない。父さんがおった頃の大きな家。」</p> <p>母(OFF) 「アイ、見てン、あそこ、ほら</p> <p>←</p> <p>(ON) あそこ、中洲の見える。」</p> <p>アイ(OFF) 「あ、ほんと中洲やん。」</p> <p>母(OFF) 「アイ、中洲の店、何軒も回って</p> <p>歌いよったね、あの頃…」</p> <p>アイ 「由利音楽教室はどの辺かなあ」</p> <p>母 「あの学校の向こう側やない？」</p> <p>アイ 「明日、由利先生んところに行ってくる。」</p> <p>母 「うん、そしときイ。先生喜ぶけん。」</p> <p>アイ 「うん。」</p>
							<p>少し間があり</p> <p>アイ、母の方を向き</p> <p>アイ、ゆっくり頷き再び</p>

			4 9
1 0		9	8
<p>ケに 体を戻し、カメラをかま</p> <p>す 手前に来るにつれてピンボ</p>	<p>外を見る。母も同じく。 外をじっと見つめる2人。 母、いきなり話題を変えて スタート、ピンボケ ファイндラーの中のアイ 前後左右に手ブレ、ピン トが合う。(アイおすまし顔) シャッターのおりる イメージでBLになり、 また元にもどる。 アイ、カメラに手をのば</p>	<p>母 「あ、そうたい、アイ、写真ば撮ろう。」 アイ 「うん」 母(OFF)「はい」 母・アイ 「チーズ！」 ^SE パシヤ(シャッター音) v</p>	<p>← アイ 「行くよ、 アイ 「今度は私が撮る」</p>

5 1		5 0	4 9
2 1	3 2	1	1 1
<p>博多湾夕景 W・I (クルージング中) 船、スナックコーナー。</p>	<p>W・O マリエラ号 アイ、ちよつと笑い 母、アイのとなりで止まる 母、少し遅れて歩いて来る アイ立ち止まる。 マリエラ号乗り場。 (夕方)</p>	<p>ラ。母、ニコリ。 母にズームアップするカメラ。</p>	<p>えて、ファインダーをのぞくアイ。 母さん笑って、はい」 アイ(OFF)・母「チーズ！」 SE カシヤ</p>
<p>母(OFF) 「海風が気持ちの良かねえ。」</p>	<p>アイ 「母さん、ひよつとして豪華客船って、これ？」 母 「あら、ちよつと、小さすぎたかいな？」 アイ 「もう、母さんには負けた。」 アイ(OFF) 「豪華客船にしとつちやああ。」</p>		

5 2	5 1
2 1	7 6 5 4 3
<p>由利音楽教室外観</p> <p>W・I</p>	<p>外明るい。とうもろこしを 食べるアイ。 ドームのあたり。 水面キラキラ。 デツキの母。 アイ、船尾。 髪が風になびいている アイ。 バックに夕日。アイと母。 W・O</p>
<p>由利先生 「お母さんから聞いたよ。 アイちゃん、コンサートの決まっただげなねえ。 ほんとによかったねえ。」</p>	<p>アイ(OFF) 「街にいと高いビルばつかして思いよったけど、 海から見ると小さく見えるね。」 母(OFF) 「ばってん福岡も都会になつてから、 昔の風情のどんどんなくなりよう。」 アイ(OFF) 「でも東京よりはマシだよ。」 母(OFF) 「アイはそげな東京で頑張りよっちゃもんねえ。 私も気合い入れんといかんねえ。」</p>

								5 2
1 0	9	8	7	6	5	4	3	
<p>心配そうに見つめる先生</p> <p>たように表情を曇らせ</p> <p>し間があり、何かを思い出し</p> <p>スタートはおだやかに、少</p>								<p>先生うれしそう</p> <p>アイ、コクリと頷き、</p> <p>教室を見るアイ</p> <p>先生の方に向き直り、</p>
<p>アイ（OFF）「昨日、写真撮ったとき、まえよりもすご痩せたなあて、</p> <p>アイ 「…私の為に無理ばっかししようけん……。」</p> <p>由利先生 「お母さんの、体のことちょっと心配やね。」</p> <p>アイ 「私が歌いよったら、母さんが</p> <p>誰よりもうれしがとったけん」</p>								<p>アイ 「ありがとうございます。」</p> <p>アイ 「この教室なつかしかあ。</p> <p>ここでレッスン受けたのが</p> <p>昨日のことのような気がします。」</p> <p>由利先生 「あなたもえらかったけど、お母さんがあなた以上に熱心やったもんね。」</p>

	5 3 B							5 3 A	
2	1	1 0	9	8	7	6	5	4	
	り、マイクを取る アイ、キーボードの前に座	アイ、元気に頷く		中井、アイの方を見て いる。	瀬尾、ご飯をかき込んで	泉、のり出し	アイ、社長の方を向く。	瀬尾の方を見ながら	美味しそうに食べる瀬尾
アイ	「アイです。こんにちは。」	アイ 「はい。」	CD売りまくろう。」	若い奴がいっぱい出て来ている。	中井 「夏休みで地方からも	社長 「母さんに気をつかわしちやっとな。」	アイ 「地元の人しか知らない店なんです。」	アイ 「……」（クスクス）	石田（OFF）「うーん。これだけで飯何ばいも食えるねえ。」
	へSE 観客のガヤン			暑くて大変だけど、明日からまた頑張ろう。」	石田 「アイちゃん、路上ライブ待ってる人がいるよ。」	泉 「お母さん、体の方は大丈夫なの？」			

			5 3 B		
8	7	6	5	4	3
<p>警官INして、まわりの</p> <p>(欠番)</p> <p>(欠番)</p>			<p>観客、2、3人が拍手して</p> <p>いる。</p> <p>(欠番)</p> <p>前髪を直したり</p> <p>ペコリとおじぎ。</p> <p>パラパラと拍手。</p>		
<p>通る人のじやまです。</p>			<p>夏休みをいただいて福岡へ帰っていました。</p> <p>また、頑張って歌います。」</p> <p>観客(OFF)「がんばってー！」</p> <p>へSE 拍手</p> <p>観客(OFF)「待ってたよー」</p> <p>観客(OFF)「がんばってー！」</p> <p>警官(OFF)「おーい！」</p> <p>←</p> <p>ダメダメ！(間)</p> <p>どいて下さい！</p> <p>←</p>		

			5 3 B
		1 1	1 0
		9	
		人々に解散をうながす。 心配そうなアイ。	
		群集をかき分けて、若い男 が迷惑そうに進もうとする。 無理やり人の間に分け入 り、一人の男が前につんのめ り、バランスをくずし、 C Dを置いてある台の方に よろめく。若い男は無視して 歩いて行く。カット尻、体を 入れ替えておしりの方からC Dの台へ突っ込む。	
		立ち止まらないで下さい！ へSE 人々のガヤ 観客A (OFF) 「何だ、いいじゃないか」 観客B (OFF) 「歌わせてやれよ」 観客C 「俺たち、アイちゃんの歌聞きたいんだよ」 観客D 「そうだ、そうだ。」	
		若い男 「じゃまだ。」 どけ！	
		男 「うわあつ」	

					5 3 B	
1 7	1 6		1 5	1 4	1 3	
スタッフが片付けをしてい じめる。	た観客が、パラパラと去りは じめる。	少し視線を下げる。 しばらく様子を眺めてい た観客が、パラパラと去りは じめる。	方々を向き、 ほっとするアイ。 アイ観客に 少し視線を下げる。	男、大丈夫そう。アイの 方々を向き、 ほっとするアイ。 アイ観客に 少し視線を下げる。	アイと中井、たおれた男 を抱えておこす。 心配そうなアイ。 男、大丈夫そう。アイの 方々を向き、 ほっとするアイ。 アイ観客に 少し視線を下げる。	CDの山にたおれこみ、 CDが散乱する。 助けに飛び出すアイ。 同じく中井。
警官 (OFF) 「はい、動いて。歌は中止です。」	「SE 渋谷の雑踏の音」	「SE 渋谷の雑踏の音」	男 「ありがとうございます。大丈夫。」	アイ 「大丈夫ですか？」	「SE ガシヤーン!!!」	

5 4 A	5 3 B
2 1	2 2 2 1 2 0 1 9 1 8
<p>つて来ている。</p> <p>カーテンから街灯の光が入</p> <p>アイの部屋 (内)</p> <p>(深夜) アイの下宿・雨</p>	<p>る。</p> <p>ファンにサインしているア</p> <p>イ。ラスト、サインを渡して</p> <p>握手するまで。</p> <p>(欠番)</p> <p>IN気味の瀬尾、</p> <p>?と向いて。</p> <p>警官IN。</p> <p>心配げなアイ。</p>
	<p>観客 (OFF) 「CDください」</p> <p>アイ (背) 「ありがとうございます」</p> <p>警官 (OFF) 「ちよっと、</p> <p>←</p> <p>(背) しつこいよ、君達!</p> <p>何度言ってもやめないと逮捕するぞ」</p>

							5 4 A
9	8	7	6	5	4	3	
<p>アイとうとうとしている。 病院の廊下。 公衆電話のダイヤルを押す 母の指。</p> <p>アイの部屋。ベッドの上 の携帯、アイなめで。 アイ、目を開けて、けだ るそうに携帯をとって出る。 病院（薄暗い）電話の前 の母。弱い。パジャマ姿。 アイ、まだ少しねぼけて いるが、母と判り安心する。 （もたれかかる） 母、苦しそうな声 （少し肩をおとし）</p>							
アイ	母	アイ	母	アイ	へS E 着信の電子音 「はい…もしもし？」 アイ（OFF）「もしもし？」 母 「アイ…」 「あ、母さん。」 「アイごめん…母さん急に具合が悪うなっ…。」 「どうしたと？どこが悪いと。病院は？」		

			5 4 A
	1 0	1 1	1 3
母、つらそう（笑おうとす るけど笑えない） 一度目を閉じ（しんどい） 再び目を開け アイ、両手で携帯持って	母、苦しそうに大きく息を 吸う。息を吐き出しながら、 とぎれとぎれに話す。	母、つらそう（笑おうとす るけど笑えない） 一度目を閉じ（しんどい） 再び目を開け アイ、両手で携帯持って	母、つらそう（笑おうとす るけど笑えない） 一度目を閉じ（しんどい） 再び目を開け アイ、両手で携帯持って
母 「うん、今、病院… 朝から、なんかきつうなつてね…。 ← アイ、母さん、ちよつと無理かもしれん…」 アイ 「何言いようと、母さん。 先生に診てもらいよつちやろう。 そげな気の弱いこと言うたらイカン。 私のコンサート来るて、 約束したばつかしやない。」	母 「あい、コンサート、う・ま・く・い・く・よ。 歌・手・や・ろ。 夢・か・な・え・て・く・れ・て・ あ・り・が・と・ね」 アイ 「母さん、元気出して！ 私、母さんに聞いてもらいたくて	母 「うん、今、病院… 朝から、なんかきつうなつてね…。 ← アイ、母さん、ちよつと無理かもしれん…」 アイ 「何言いようと、母さん。 先生に診てもらいよつちやろう。 そげな気の弱いこと言うたらイカン。 私のコンサート来るて、 約束したばつかしやない。」	母 「うん、今、病院… 朝から、なんかきつうなつてね…。 ← アイ、母さん、ちよつと無理かもしれん…」 アイ 「何言いようと、母さん。 先生に診てもらいよつちやろう。 そげな気の弱いこと言うたらイカン。 私のコンサート来るて、 約束したばつかしやない。」

5 4 B	5 4 A		
1	1 7	1 6	1 5 1 4
<p>アイの部屋（朝） ベッドの上に寝ている アイ。手元に携帯電話。 携帯が鳴る。手を伸ばし、 バツと起き上がり携帯を開 く。（母からの電話かと思っ て 出る）</p>	<p>母、息絶え絶えに 目を閉じ、一息ついてから 最後のセリフ 力無く受話器をおろす母</p>		
<p>^S E 朝の音< ^S E 着信電子音<</p>	<p>母 「わかつ・・・とうよ。 歌いよっちゃけんね。」 ← ご・め・ん・ね。あ・り・が・と・う… アイ 「母さん？母さん？」 ^S E ツーツーツー…<</p>		

5 5	5 4 B				
	6	5	4	3	2
カンファランスの事務所 写真	<p data-bbox="1228 548 1268 728">少し起きて</p> <p data-bbox="893 548 1005 884">愕然のアイ、少し携帯 下げる。</p> <p data-bbox="758 526 869 963">震える唇。携帯を持つ手も 震える。涙流れる。</p> <p data-bbox="694 548 734 739">携帯OUT。</p> <p data-bbox="630 548 670 593">窓</p> <p data-bbox="422 526 606 963">号泣するアイ。テーブルの 上に数日前に写した母との写 真が見える。</p>				
	<p data-bbox="1292 974 1340 1556">アイ 「もしもし、あつ…、</p> <p data-bbox="1228 974 1268 1131">由利先生」</p> <p data-bbox="1093 974 1204 1747">由利先生（OFF）「アイちゃん、しっかり聞くとよ。 今朝ね、お母さんが亡くなったと。」</p> <p data-bbox="957 974 997 1332">アイ 「…」</p> <p data-bbox="821 974 869 1646">由利先生（OFF）「アイちゃん、アイちゃん、 しっかりして、</p> <p data-bbox="694 974 734 1198">アイちゃん…」</p> <p data-bbox="630 974 670 1377">アイ（OFF） （泣き声）</p>				

5 6	5 7
8 7 6	3 2 1
<p>時計のUP。10時過ぎ。 社長、立ち上がり 少し考えてから</p>	<p>福岡空港 到着ロビー（外） 自動ドアが開く。 中からアイと社長が出て来 る。アイ、制服を着てうつむ いている。社長は黒いスーツ にカバンを持つ。 空港、タクシー乗り場。 タクシーはハザードをつけ ている。タクシーに乗り込む アイと社長。</p>
<p>アイ 「七時頃、音楽…教室の…先生から…」 社長（OFF）「えっ、七時！」 社長 「じゃあ三時間も一人で居たのか…」 アイ、すぐ福岡に行こう。」</p>	<p>へSE ガヤ</p>

5 8	5 9
1	2 1
<p>タクシー内（外は市街地） アイと社長。 アイ、涙をこらえている。 アイをチラリを見る社長。 アイ、少し頭を下げる</p>	<p>入道雲 葬儀場、駐車場（外） 数人の関係者。小さな葬儀 場。葬儀の準備をしている。 タクシーを降りた社長と中か ら出て来るアイが見える。 葬儀場入口付近（外） 涙を浮かべながらアイを待 っている由利先生。 中へ入ってくるアイと社 長。先生、アイに気づき、</p>

59				
8	7	6	5	
<p>早くで</p> <p>アイに駆け寄る先生。そばに寄り、アイを支える先生。</p> <p>社長、先生に会釈。</p> <p>先生も社長に一礼して、すぐアイの方を向く。</p> <p>祭壇に向かうアイと先生。</p> <p>先生はアイの肩を抱いている。アイ、フラフラ歩いてゆく。</p> <p>アイ、INしてきてしゃがむ動作。唇をかみしめる。</p> <p>静かに眠る母の顔</p> <p>アイ、体は震えているが、涙は出ない。唇がかすかに動く。</p>				
<p>由利先生（背）「アイちゃん」</p> <p>社長 「ああ…」</p>				

		6 2	6 1	6 0	
3	2	1			1 1 — 9
先生、体を戻す。	社長、ペコリ。	の方へ出す。	先生、湯飲みを持ち、社長	入れているところ。	2つ目の湯飲みにお茶を
先生	先生	先生	先生	先生	先生
社長(背)	社長(背)	社長(背)	社長(背)	社長(背)	社長(背)
「恐縮です。」	「どうぞ」	「どうぞ」	「どうぞ」	「どうぞ」	「どうぞ」
					アイ
					「かあさん…」

6 5	6 4	6 3	6 2
1	2 1	3 2 1	5 4
翌朝 火葬場（外）	涙の跡が頬に見える。 イ。 棺のそばで寝入っているア	社長。 夜 夕景 O・L	社長も先生の方を見て、 キリリと。 少しのり出す気分で 何やらしゃべっている 2人。音は聞こえない。
			社長 「いつも先生のこと、アイから聞いていました。 この度はいろいろお世話になりました」 由利先生 「いいえ。 ところで社長さん、実は、アイちゃんの 身の上のことで少しお話しが…」

6 5		
4	3	2
<p>くる。</p> <p>があつて左右から扉がおりて</p> <p>棺が中に入りきる。少し間</p>	<p>入ってゆく棺。</p> <p>棺が中に入りきる。少し間</p> <p>するアイを先生が制す。</p> <p>火葬室（内）。中は暗い。</p> <p>入って行く棺に近づこうと</p> <p>める。</p> <p>入れる。棺がゆっくり入り始</p> <p>める。</p> <p>係の人がそばのスイッチを</p> <p>入れる。棺がゆっくり入り始</p> <p>める。</p> <p>無機質な空間。</p>	<p>無機質な感じ</p> <p>火葬場（内）</p> <p>火葬室の前、台車に載った</p> <p>棺の前に参列者が取り囲んで</p> <p>いる（8人）</p>

		6 7	6 6	6 5
4	3	2	1	6 5
<p>出口へ向かって走るアイの廊下を走るアイ。</p>		<p>待合室に向かって歩いていくアイと先生（先生はアイを支えている）</p> <p>アイ、急に立ち止まり、先生の腕を振り払い、出口方向へ向かって走り出す。</p>		<p>扉が閉まり、真暗になる。</p> <p>係の人の手が入ってきて、点火ボタンを押す。</p> <p>その音を聞いて、卒倒しそうになるアイ。</p> <p>先生が受け止める。</p>
<p>由利先生 「アイちゃん！」</p> <p>社長 「アイ！」</p>		<p>由利先生 「アイちゃん！」</p> <p>社長 「アイ！」</p> <p>アイ 「あつ…」</p> <p>SE ボツ</p> <p>SE ゴーツ</p>		<p>SE ガシャーン（シャッターの閉まる音）</p>

										6 7
1 4	1 3	1 2	1 1	1 0	9		8	7	6	5
<p>脚。光の中に入る感じ（外へ出る）</p> <p>泣きながら外へ出て来るアイ。</p> <p>（欠番）</p> <p>母の呼ぶ声が聞こえる。</p> <p>あわてて振り返るアイ。</p> <p>アイなめ、火葬場の屋根。</p> <p>母のカゲロウ、わきたって上昇してゆく。</p> <p>見上げるアイ。</p> <p>アイUP</p> <p>（欠番）</p> <p>アイと重なる翼。</p>										

6 8	6 7
5 4 3 2 1	1 5
<p>ふと壁に目をやる。</p> <p>写真UP</p> <p>整理している。</p> <p>アイ、福岡で撮った写真を影がある。</p> <p>机の上に父の写真と母の遺影がある。</p> <p>(欠番)</p> <p>アイの部屋(内)・夜</p>	<p>とんでゆく共に母の光。戯れるように周囲をまわり、カメラ近づいてゆく。背に乗せた感じで羽ばたいて、飛び去ってゆく。</p> <p>幻想的な雲の彼方へ消えてゆく。</p> <p>(欠番)</p>

7 2	7 1	7 0
2 1	2 1	6 5 4
翌朝 事務所のビル（外） 事務所の廊下。ドアの前。	学院長室（夕方） ソファに座ってアイをし かっている学院長。 アイはうなだれている。 夕方、西陽が窓から差し込 んでいる・放課後 アイ、トボトボ	アイ、皆の話をさびしそ うに、うつむいて聞いている。 アイ、声に反応 ちよつとどきまぎ
〈SE 朝の雑踏の音〉	生徒 「あははは…なんなんだろ」 生徒 「わかんない」	レポートやばかった。 生徒④（OFF）「レポートなあ、あれ結構時間くつたんだよね。」 事務員（OFF）「アイさん」 事務員 「放課後、学院長の所へ来て下さい。」 アイ 「は、はい！」

						7 2
						3
						社長の手が入ってきて ドアを開ける。 外、出て来る社長、気づく。 行こうとした先に アイIN。 驚く社長、ドア閉まる。 俯くアイ。 社長、少し出て 心配げに見つめて 黙ったままのアイ。 社長、ポケットに手をやり つつ アイ、やや強く打ち消す感 じで向くも、 また小さく下へ目をやって しまう。
						<p>社長 「おう、アイか。」</p> <p>社長 「おはようございます。」</p> <p>アイ 「アイ、どうしたんだ。学校は休みなのか？」</p> <p>アイ 「いえ…」</p> <p>社長 「調子でも悪いのか？」</p> <p>社長 「学校で何かあったのか？」</p> <p>アイ 「……」</p> <p>社長 「授業料とかの問題もあるし、俺も気になってたんだが…。」</p> <p>アイ 「いえ…」</p> <p>学校はもう…」</p>

					7 3	7 2
5		4	3	2	1	9 8
手をのびしながら		学院長、コーヒークップに	社長、乗り出し	学院長	社長、軽く頭を下げる。 学院長	唇を震わせるアイ
もう一つ問題があるんです。」		学院長 「いや、アイさんには	七月からの滞納分も今すぐ払いますから…」	社長 「ですから、レポートはすぐ出させます。	学院長 「アイさん、お気の毒とは思いますが、ルール違反はルール違反ですから。」	生徒の声 「ワー、ワー（ガヤ）」
					午後 宇田川学院（外）校庭 生徒達が体育の授業をして いる。	社長、肩に手をやり 唇を震わせるアイ
						社長 「アイ、どういうことだ。 社長室に来て、ちゃんと説明しなさい。」 アイ 「……」

						7 3
1 2	1 1	1 0		9	8	7 6
社長の言葉をまじめに	社長、少し考えて決意！	学院長も少しムツとし	社長も強気。	(娘をバカにされた気分)	少しムツとする社長。	一口飲む 社長、？と反応 学院長、コーヒーカップを 戻しながら、平静を装いつつ、 きつい言葉。
社長(背)	社長	学院長	学院長	学院長	学院長	社長 「ん？」 学院長 「アイさんは路上で制服のまま 歌を歌ってるそうですね。 本学院の生徒にあるまじき行為です。」 社長 「制服着て歌っちゃいけないんですか。」 学院長 「当学院の品位を著しくけがしていると 思いませんか。」 社長 「制服着て歩いてると、制服着て歌ってるのと どこがちがうんですか。」 学院長 「そんなへ理屈は聞きたくありません。とにかく アイさんは当学院にふさわしくない…。」 社長 「わかりました。あの娘は生きる為に、 そして夢にかけて必死なんです。」

						7 4	7 3
5	4	3		2	1 b	1 a	1 4
頑なに	アイ、更に頭を下げて、	瀬尾、やさしげに	通信制高校の資料。	尾がいる。テーブルの上には、	事務所(内)	センター街の前。	社長、言い切る
瀬尾	「アイちゃん、俺たちがついてる。頑張ろう。」	路上ライブも大丈夫よ。」	スクーリングで卒業出来るのよ。	毎日通わなくてもレポートと	(ON) 通信制高校へ行こう。	泉(OFF)「アイちゃん、	そんなもんなんですか。」
					←		社長 「形にばかりこだわって、人間の大事な部分を見ようとしな
							アイはこちらからやめさせていただきます」

7 5	7 4
2 1	8 7 6
<p>アイの下宿（外）・早朝 うつすらと朝もやが かかっている。 アイの下宿の勝手口。 階段を下りて来たアイ。 （肩にはリュックをかけて いる）</p>	<p>中井、アイの方を見て 石田もやさしく アイ、目の下にうつすらと 涙がたまってる。</p>
	<p>アイ 「すみません、もう…学校いいんです…」 中井 「アイちゃんには歌があるんだから、元気出して。 君の歌聞きたいって人が いっぱいいるんだから…」 石田 「アイちゃん、これからは社長が父さんで、 俺たちが兄さんで、泉が姉さんだよ。」 瀬尾 「うん！」 石田（OFF）「俺たち、血はつながってないけど、 家族なんだよ。」</p>

7 6	7 5
5 4 3 2 1	3
<p>事務所。 10時30分すぎ。 壁の時計。秒針が動いて いる。 アイを待っている瀬尾、 石田、中井、泉の4名。 ドアが開く。 4人、入口の方を見る。 入ってきたのは社長。後ろ</p>	<p>扉を開けて、手と体をいれ かえ、扉を閉めて、歩いてF ROUTまで。 人気のない高架脇を駅に向 かって歩いてゆくアイ。 (さびしそう) (外灯はまだついている)</p>
<p>石田・泉・瀬尾「あ…」</p>	

7 7	7 6			
	9	8	7	6
アイ下宿の前 (AM11時すぎ)	<p>手でドアを閉めながら部屋を見回して</p> <p>泉、社長を目で追う</p> <p>社長、石田の後ろを通り、隣のイスへ手をかける。</p> <p>泉に視線をやる。</p> <p>泉、立ち上がる。</p>			
	<p>社長 「アイはまだか、遅いなあ。」</p> <p>中井 「すみません、学校のことやライブの再開のことで、10時から打合せて伝えたんですが…」</p> <p>泉 「携帯がつかないんです。下宿の人は朝早く出たようだっていうんですが…」</p> <p>石田 「アイちゃん、時間には正確だよな。何かあれば連絡してくるはずだし…」</p> <p>社長 「うん、ちょっとおかしいな。」</p> <p>泉、すまんがアイの下宿に行ってみてくれ。」</p> <p>泉 「わかりました。もし行きがちがいになったら、携帯に連絡ください。」</p>			

7 8	7 7
2	3
1	2
<p>1</p> <p>ラームン屋。</p> <p>泉が入口のところで、アイが来てないか尋ねている。</p> <p>軽くおじぎをして、左右を見ながら出て来る。</p> <p>(欠番)</p>	<p>1</p> <p>泉が勝手口のドアを閉めながら携帯をかけている。</p> <p>事務所(内)</p> <p>社長が電話に出ている</p> <p>(心配げ)</p> <p>泉、部屋の方を見ている</p> <p>携帯を閉じる</p> <p>2</p> <p>泉(OFF) 「やっぱりいません。」</p> <p>泉(背) 「下宿は朝早くでたままです。」</p> <p>社長 「携帯もダメだしなあ。</p> <p>泉は美容室とか元のバイト先とか、当たってみてくれ。心当たりを全部探すんだ。」</p> <p>泉 「わかりました。アイちゃんが行きそうなところは、全部当たってみます。」</p>

		7 8	
6 5		4	3
<p>喫茶店。入口の扉を開けて、 店員にアイのことをたずねて いる瀬尾。店員の女の子は、 『来ていませんよ』と答えて る。瀬尾、一礼して扉を閉め る。</p>		<p>(欠番) 金王坂下、歩道橋の上 青山通りを車が走って いる。</p>	
瀬尾		石田	
「そうですか…。」		「ここにもいません。」	

7 8	7 9
7	3 2 1
<p>ブティックから出てくる 泉。(ゆっくりと) 踊り場で立ち止まり、『だめ だわ…』とため息まじりに大 きく首を振る。 広いレコード店の中を探す 中井。キョロキョロしながら 歩く。</p>	<p>事務所(午後) 社長が一人で連絡を待つ ている。 ドアの開く音に社長反 応。 石田が入ってくる。息が 少し荒い。</p>
<p>泉 「だめだわ…」</p>	<p>へSE ガチャ 石田 「ダメです。 歩いていそうなところも全部探しています。 今のところ手がかりなしです。」 社長 「そうか…失敗した…」</p>

8 2	8 1					8 0
1		1 0	9	8		7
電車の中、割とすいている。	(欠番)	悪態をつく 女、少しだじろいした後、 アイ、そのまま走り去る。	引くが、アイはつかまれてい る腕を強く振り払う。	アイの腕をつかむ女。 手のUP。女、アイの腕を 引くが、アイはつかまれてい る腕を強く振り払う。	声をかける。 すかさずアイの元に駆け寄り ターゲット(アイ)を発見！ 立っていた厚化粧の女、 歩くアイ。	いているアイ。 すかさずアイの元に駆け寄り ターゲット(アイ)を発見！ 立っていた厚化粧の女、 歩くアイ。
		女 「何よ、人が親切に言ってあげてんのに！」		女 相談にのるわよ。 ねえ一緒にいこう！」	女 「ねえ、どうしたの。心配ごと？」	

									8 2
9	8	7	6	5	4	3	2		
郊外行きの列車。 扉の前に立って外を見て いるアイ。		アイ、暗い表情。		西へ向かって走る電車。 次第に小さくなってゆ く。		(欠番) (欠番) わずかに力なくゆれる ブランコの鎖。		寂しげなアイ。ポツンと 一人。	
老人、ダンボールをゆっく り下ろして整え、アイを見る。		^SE キー、キー、キー… ^SE ガタンゴトン、ガタンゴトン… ^SE							

8 2					
1 5	1 4	1 3	1 2	1 1	1 0
<p>壁にはまとめたダンボールが立てかけられている。 また仕事に戻ろうとするが、すぐにアイの事が気になり、そちらを見る。 老人よりアイへPAN。 電車IN。 (欠番) アイ、音が遠ざかり俯く。 しばしあって、ゆっくりと立ち上がる。 フラフラとした感じで歩き、階段へ向かう。 INして階段を昇る足。 重く、力ない足どり。 ゆっくり昇るアイ。</p>					
^SE ゴ… v					

						8 2									
	2 2	2 1		2 0	1 9	1 8	1 7	1 6							
	る。	呼びかけに、少しビツクリす	しゃがみこんでいるアイ。 (欠番)	がみこんでしまう。	アイ、その場へ力なくしゃ	と、しばし間。	電車O U Tしておさまる	逆に流される。	走る電車。葉や髪、風とは	来る電車。	風が吹いても気づかない。	呆然と見ているアイ。	ポツンと立つアイ。	起こす。	気になって見る老人。身を
老人(O F F)「お嬢さん？」									へS E	ゴー…					

8 2						
2 9	2 8	2 7	2 6	2 5	2 4	2 3
<p>やさしい眼差しの老人。 フレーム外で立つアイを目で 追う。</p> <p>ゆっくり立ち上がるアイ。 老人を見る。 微笑む老人。 アイ、しばし見つめて、 無言のまま歩き出し、 ラスト、階段を下りる角度 でOUT。 トボトボと下りてゆく アイ。 アイを見ている老人。 老人、見た目。トボトボと 歩くアイ。ゆっくりベンチに 座す。</p>						
<p>老人 「若い女性がそんな悲しそうな顔をしてちゃ、 いけねえな。」</p>						

								8 2	
3 7	3 6		3 5	3 4	3 3	3 2 B	3 2 A	3 1	3 0
アイを見て	老人、自嘲して	老人UP	ブルブルとふる。 猫、茂みから出てきて、	公園、ベンチの対面	トラックIN—OUT。 猫、茂みから出てきて、	ベンチの端へ座る老人。 反応しないアイ。	俯くアイ。 少し反応するアイ。	同UP INする老人。	俯いているアイ。
安心しな！」	でも、人様の迷惑になることはしないから	見ている通りのホームレスさ。	捨てちゃった人間だ。	老人 「わしやあ、家も家族も、いや名前さえ	老人 「さっきから気になっていたんだ…。」	老人 (OFF) 「相当つらいことがあったんだねえ…。」			

							8 2	
4 0 F	4 0 E	4 0 D	4 0 C	4 0 B	4 0 A	3 9	3 8	
<p>老人をじつと見るアイ。 ぼんやりと理解を深めて、</p>		<p>老人の方を向くアイ</p>	<p>2人の後ろ姿。 線路ナメ、公園の2人。</p>	<p>にこやかに話す老人</p>	<p>少し見るアイ。 アクビする猫。</p>	<p>アイ</p>		
<p>無性に愛おしく感じられてきてねえ」</p>		<p>老人 「そう思ったらねえ、生きてるってことが、 アイ 「エッ？」</p>	<p>みんな死んでしまうんだ」 人間100年もしないうちに、 老人(背) 「でもねえ、お嬢さん、</p>	<p>老人を投げ出そうとしたことがあった」 老人 「わしもねえ、若い頃、自分の弱さに負けて、</p>	<p>老人(OFF) 「ははっ、もつとも、わしらの存在自体が この街では迷惑ってことになるんだがなあ… はっはっはっは…」</p>			

	8 2
<p>4 3 老人、アイを見て 2人見合う。 台詞後も、少し見合つて、</p> <p>4 2 ベンチの2人。 少し間があつて、 背筋のばす老人。</p> <p>見るアイ。</p>	<p>4 1 目線落とす。 アイを見る老人。</p> <p>老人、顔を戻して、しんみり りと</p> <p>老人 「時は金なりつて言うだろう。 どんな胸の痛むことでも 時が経てば薄れていくもんだよ。」</p> <p>老人 「一生懸命生きていけば、 お嬢さんを支えてくれる人が必ず出て来るよ。 お嬢さんを必要としている人も、 きっと現れるはずだ。」</p> <p>老人（背） 「お嬢さん、何があつたか知らんがねえ。 お嬢さんには時がある。」</p> <p>アイ 「……」</p>

8 3	8 2						
1	4 9	4 8	4 7	4 6	4 5	4 4 B	4 4 A
夜 事務所近くの道。人気は	<p>ゆつくりと顔を戻すアイ。 夕空を見て 夕空 夕空を見る老人とアイ。 アイ、俯いて 2人の後ろ姿。 老人を見るアイ。 驚くアイ 老人、にこやかに 表情をゆるめ頷くアイ 広がる夕空</p>						
	<p>アイ 「……」 老人（背） 「なあ、お嬢さん、事情が許せば、 東京を離れて地方に行ってみるといい。」 アイ 「え……？」 老人 「……日本も広いぞ！結構いいところもあるしな。 気持ちを変えろと 頑張ろうって思えるもんだろ。」 アイ 「うん……」</p>						

83				
5	4	3	2	
<p>なく、タクシーが一台通る。 会議用テーブルに座っている社長。(不安そう) 頭をかかえる。 (間) 電話の音に素早く反応。 電話に駆け寄り、受話器を取り、出る。</p>				
<p>あぁ、と安心する社長 由利音楽教室</p>				
<p>社長 (背) 「はい、秋葉…」 社長 「あつ由利先生。」 由利先生 (OFF) 「アイちゃん無事でした。」 社長 「あぁ…」 由利先生 「社長さん、おこらんでやって下さい。 今、電話のあつて、一時間位で事務所に帰るそうです。」 社長 「帰るって、 (大きく息をはいて) いやあよかった。」</p>				

8 4	8 3
2 1	8 7 6
事務所（一時間後） アイが座っている。	社長。 ラスト、更に肩を落とす 社長、じつと聞いている
社長（OFF）「アイ、つらかったら歌手やめてもいいんだよ。」 社長 「歌つらかったら、苦しまなくてもいいから。」	由利先生（OFF）「社長さん、アイちゃんには 帰るところがないとです。」 由利先生 「みなさんにようしてもらって アイちゃんはどううれしいはずです。でも…」 ← 由利先生（OFF）「私達には『じゃあ、また明日』て 帰っていくところがあるとです。」 でも、アイちゃんには―（涙声） 社長 「アイを気づかったつもりでしたが、 それがアイの心には重かった。 あの娘の心の空白を 本当には解ってなかったんです。」

8 4		
5	4	3
<p>中井、ちよっとおどけて肩 見つめる。</p> <p>同じく泉、中井もアイを 見つめる。</p>	<p>うんうんとうなずく。</p> <p>石田、ウルウルとなり目を こする。</p>	<p>一回想いをまとめてから (たっぷり間を取って)</p> <p>元気に</p> <p>石田の方を見て、</p> <p>瀬尾を見てから中井を 見る。最後は泉を見上げる</p> <p>アイをやさしくみつめる</p> <p>社長、瀬尾、石田。瀬尾、</p>
	<p>中井</p> <p>瀬尾</p>	<p>アイ 「(間) </p> <p>すいません、みんなに心配かけて！</p> <p>←</p> <p>でも、もう大丈夫です。</p> <p>学校も</p> <p>みなさんがすすめてくれるところに 転校します。」</p> <p>泉 「アイちゃん…」</p> <p>「うん」</p> <p>「うん、うん」</p>

	8 7		8 6	8 5	
	2	1	1		
	アイ、自分の膝元を見つめ のお茶とポテチとポッキー。 テーブルの上には紙コップ 泉は頬杖をついている。 アイ、膝を抱えて、	アイのアパート・夜	大木の生えている小道をア パートへ帰るアイと泉。外灯 のある部分のみ明るい。ラス ト、カゲの中へ入るまで。	(欠番)	をすくめてみせたり。 そんな中井を見てちよつと 苦笑のアイ。
	(ON)「一番やりたいことをやればいいと思うよ。」 ←	泉(OFF)「私はアイちゃんが			

				8 7
6	5	4	3	
<p>泉、安心してさせるようになる。</p> <p>アイ、泉の言葉を聞いて嬉しくなるが、また不安な表情になる。</p>				<p>ている。</p> <p>泉、コクリと頷き</p> <p>アイ、顔をあげ、泉の方を見る。</p> <p>言っているのかなと、躊躇する。でも言っちゃえ！</p> <p>泉、ちよつと乗り出して</p>
<p>アイ</p> <p>「でも、そんなこと、今の状態で許されるのかなあ。」</p> <p>きつと曲づくりの役に立つと思うよ。」</p> <p>いろいろな所を見て歩くのも</p> <p>メールも地方からのが結構多いしね。</p> <p>泉 「私は賛成。」</p> <p>私の歌聞いてくれる人の前で歌ってみたいな。」</p> <p>地方のいろんな街で、</p> <p>私ね：</p> <p>それだけじゃないってことがわかったの。</p> <p>アイ 「母さんのこともあるけど、</p> <p>泉（背） 「うん、お母さんのためにね。」</p> <p>アイ 「母さんのことあるけど、</p>				<p>アイ 「…やっぱり歌っていきたい…」</p>

		8 8
	4 3	2 1
	<p>社長、3人を見渡して</p> <p>(欠番)</p> <p>社長、石田の方を向く</p>	<p>数日後・日中</p> <p>事務所のビル(外)</p> <p>向いのビルにとまっている</p> <p>二羽のハト。</p> <p>事務所(内)</p>
	<p>社長</p> <p>「お前たちが賛成なら、チーム組んで地方を回って、</p>	<p>社長(OFF)「アイは大分元気になった。」</p> <p>社長 「泉には、地方へ行って歌いたいわって言ってたそうだ。」</p> <p>中井 「いい曲を作るには、見聞を広めた方がいいですよ。」</p> <p>石田 「1000回ライブって渋谷にこだわることはないもんな。」</p>
		<p>泉 「私、それとなく社長に聞いてみるよ。」</p>

					88
	9	8	7	6	5
	<p>石田、瀬尾、中井と見渡</p> <p>社長、ちよつと笑つて</p>	<p>社長、石田の方を向き</p>	<p>瀬尾、社長を見ながら同調する。</p>	<p>次に瀬尾の方を見て</p> <p>社長、中井の方を見てる。</p> <p>中井、瀬尾の方を向いて</p>	<p>瀬尾、社長の方を見て</p>
<p>社長</p> <p>「社員はお前達に決まつてるだろう。」</p>	<p>社長</p> <p>「ばかやろう。まわりを見てみる。」</p>	<p>石田</p> <p>「社長は社長がやるとして、社員とかは？」</p>	<p>金融機関とも今までの付きあいあるしな。」</p> <p>社長</p> <p>「設立の資金は俺が何とかする。」</p>	<p>瀬尾</p> <p>「その方がいろんな面で行動しやすくなりますね。」</p>	<p>瀬尾</p> <p>「どこを回るかによるけど、旅費やホテル代が大変でしょう。」</p> <p>中井</p> <p>「地方でもライブやればCD売れるだろう。」</p> <p>社長</p> <p>「そのことであ、この際、アイをマネージメントする会社をつくろうと思うんだ。」</p>

						8 8
	1 5	1 4	1 3	1 2	1 1	1 0
る学生達	次第にまじめに聞きはじめ	石田も芝居がかって	瀬尾、おどけるように	瀬尾と中井の方を見る。	社長、石田の方を見て	しながら 中井、ちよつと戸惑う
他では得られない体験もできる。	社長 「それからは今まで以上に苦労が多いが、」	石田 「酒とメシには十分ありつける！」	瀬尾 「給料なし！」	瀬尾 「お前何言ってんだ、学生で起業したかったから」	中井 「それもそうだけど…。」	中井 「僕達、学生ですよ？」

							88					
22	21	20	19	18		17	16					
中井を見る一同。	熱弁の社長。		る。 社長、手をつけて立ち上がる。	(欠番)								
中井 「それは僕も同感です。でも社長、	こういう歌い手が求められているんだよ。」	何かがあるんだよ。これからの時代、 人の心をきれいにしてくれる	優しさがあり慈しみがある。	アイは必ず売れる。アイの歌、アイの声には	社長 「大丈夫、	石田 「即、倒産だ！」	瀬尾 「ということは、もし売れなかったら…」	アイをマネジメントする会社なんだから」	社長 「当たり前だ。」	歌手なんですすよね。」	瀬尾 「とは言っても社長、新会社はアイちゃんだけが	それは給料以上の価値だぞ！」

	88
<p>26 中井、瀬尾、まじめに社長の話を聞いている。</p> <p>25 がつくりと座る社長。</p> <p>ながら</p> <p>口元少し引きつらせ</p> <p>中井の方を見て</p> <p>瀬尾、意味不明な自信。</p> <p>24</p> <p>23</p> <p>！！となる石田。</p> <p>がつくりと天を仰ぐ。</p>	<p>僕達が社員としてやっていくとなると、大きな問題があります。」</p> <p>石田 「えっ？何か問題ある？」</p> <p>中井 「来年卒業できないだろ。」</p> <p>石田も単位不足だろ？」</p> <p>石田 「…あつ、あーそういうことか！</p> <p>…留年になるのは間違いない。」</p> <p>瀬尾 「お前らさあ、一年留年ぐらいでジタバタするな。俺なんてこのままいけば</p> <p>まちがいなく二年留年だ。」</p> <p>社長 「そうか、瀬尾は今も留年の身の上なんだ。社員になって留年したんじゃ、</p> <p>親ごさんに申し訳ない。」</p> <p>社長（OFF）「何とか時間作って、大学へも行くことだ。」</p>

9 1	9 0		8 9	
1		3	2	1
<p>事務所（昼） テーブルの上。瀬尾の手元。 右手でメモを取りつつ、自分</p>	<p>（欠番）</p>	<p>で合図を送る。 ながら歌っている。ギターに目 アイ、キーボードを弾きな アイ。 練習している学生バンドと アイ。</p>	<p>昼2時頃 貸しスタジオ廊下。スタジ オ内の音がこぼれている。 スタジオ内。</p>	<p>顔を見合わせて、 「うーん」という表情。</p>

9 2	9 1
1 2	3 2
<p>ビルの上 出版社（昼） ビルを見上げるスーツ姿の 石田と瀬尾。</p>	<p>の名刺を左手で 持つてる（少し持ち上げる） ホワイトボードに「営業会 議」の文字。 社長が、中井、石田、瀬尾 の3名にレクチャーしてい る。3名はメモとか取ってい る。 社長、気合が入っている。 ペンを振りながら</p>
<p>瀬尾（背↓OFF）「編集長にアイちゃんのこと話したの？」</p>	<p>社長（OFF）「お前たちの強みは若さだ。」 社長 「テレビ局やラジオ局、 あるいは新聞社や出版社にアポが取れたら 会社のエライさんに直接ぶつかれ。」 社長 「いいか、エライ人は会社の入口近くにはいな い。 奥の方にいることを忘れるな。」</p>

9 5	9 4	・	9 3	
	5	4	3	2 1 3
4 F、 編集部。	(欠番) エレベーター内の2人。	別の人INして笑顔になる 受付嬢。	(欠番) ?と見送る受付嬢。	(欠番)
瀬尾 (OFF) 「とにかく、エライさんは奥だ。」 ^SE ポーン	瀬尾 (OFF) 「確かにね。」	石田 「とっさに思いついたのさ。 アイちゃんにぴったりだろ？」	瀬尾 (OFF) 「渋谷の天使？」	石田 (OFF) 「知らないって言うからさ、 渋谷の天使っていわれている ストリートミュージシャンだつて 言っておいた。」

				9 5	
		4	3	2	1
		石田と瀬尾、呆然と立っている。その後ろでエレベーターの扉が閉まる。			
		雑然とした部屋で忙しそうに仕事をしている編集部の社員。誰も2人など気に止めない。			
		ちよつとびびってる2人。			
		部屋の中を見回す。			
		瀬尾、何かに気がつく。			
		部屋の奥、ソファに座っている人。			
		瀬尾、アゴでソファの方をさして小声で			
石田も小声で					
石田					
瀬尾					
		へSE ガヤ			
「あそこの人が一番エラそうだ。」					
「アポとってるって顔で、どんどんいこう。」					

		9 5
7	6	5
<p>立ち上がる。</p> <p>男、いぶかしげに</p> <p>2人同時に</p> <p>あわてて。</p> <p>を出す。続けて瀬尾も（少し</p> <p>石田、手に持っていた名刺</p> <p>石田おじぎ、続けて瀬尾</p>	<p>男、気がつき顔を上げる。</p> <p>石田と瀬尾、ガチガチ</p> <p>立つ。</p> <p>瀬尾INして男の前に</p> <p>奥のソファに座って書類</p> <p>を見ている男。（めくったり、</p> <p>もどしたり）</p>	<p>瀬尾、コクリと頷く。</p>
<p>男</p> <p>石田・瀬尾</p> <p>「はあ？僕に用事ですか。」</p> <p>「よろしくお願いします。」</p>	<p>瀬尾</p> <p>「同じく瀬尾と申します。」</p> <p>株式会社MIRAI営業部の石田です。」</p> <p>石田</p> <p>「電話で失礼しました。」</p>	<p>瀬尾</p> <p>「うん」</p>

	9 5
<p>石田の手に名刺。 続けて男の手INしてきて、名刺を受け取る。</p> <p>男、名刺を見ているが 石田達のことさっぱり分からず 石田、勝手が違い困惑。</p> <p>そこに編集長IN。 石田と瀬尾も反応。2人の会話を聞いている。 2人軽く会釈する。 石田と瀬尾、人違いに気がつき焦る。</p>	8
<p>男 「えっ？MIRAI？何の会社？」</p> <p>石田 「えー、ですからアイっていう 新人歌手がおりまして…。」</p> <p>男 「えっ、アイ？何それ？」</p> <p>編集長 「いやー、宮本さん。お待ちせしました。」</p> <p>男（宮本） 「いや、編集長こそ、お忙しいところを…。」</p>	

	9 5
<p>1 5 宮本はやはり苦笑い中。</p> <p>1 4 石田と瀬尾、情けない顔で説教を聞いている。</p> <p>1 3 編集長、怒ってるのか呆れてるのか</p>	<p>編集長、石田と瀬尾の方を見て</p> <p>男（宮本）、苦笑いを浮かべながら</p> <p>ギクツとする2人。</p> <p>（冷汗タラーリ）</p> <p>チラリと顔を見合わせ、勢いよく謝る。2人同時に</p> <p>石田・瀬尾 「すみません！」</p> <p>石田 「午前中にお電話した、株式会社MIRAIの石田：。」</p> <p>編集長 「あ、そういうことですか。しかし、君たちどうしてここにいますか。」</p> <p>編集長（OFF） 「普通、受付を通してくるのが常識でしょう。」</p> <p>編集長 「しかも、お客様に営業するなんて考えられない人たちだ。」</p>
<p>1 2</p>	<p>編集長 「君たちは何？」</p> <p>男（宮本） 「いや、いきなり私に『アイ』だとか何だとかって言うんで：。」</p> <p>石田・瀬尾 「えっ！」</p>

														9 7	S
1 4	1 3	1 2	1 1	1 0	9	8	7	6	5	4	3	2	1		C
武)前	福井・だるまや西武(福井西												画面		
														福井・東尋坊	『実写シーン』
ない手 かわしたね	出会った永遠(とわ) の仲間達 あどけ	ながら	波打つ胸をはずませ		4月の教室で	桜舞う								音声	〈BGM 『旅立ちの日に…』

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15
長野・千曲川					長野・善光寺		京都・JR京都駅前	京都・東寺		京都・清水寺		京都・安楽寺			京都・嵐山
輝く日々を忘れないで もう開けない	会える気がするからね	立つもの だけど いつの日にか またどこかで	の日 人はいつか 旅	もう今日は 卒業	陽だまりの粒 いつのまにか 時は流れ	交わした約束 みんな きらめく	指切りをして	の店 いつもの駄菓子屋 忘れてないよ	放課後行った 常連	ケンカもしたね	素直になるの嫌って ぶつかり合って	光る汗 時に	笑顔によく映えた	校庭	あの日 かけまわった

4 6	4 5	4 4	4 3	4 2	4 1	4 0	3 9	3 8	3 7	3 6	3 5	3 4	3 3	3 2	3 1
熊本・熊本城	北海道・札幌狸小路											北海道・札幌雪まつり			長野・JR長野駅前
希望の道 今日までありがとうね 思い出の校舎と別れを	今始まる	息づいている	私の胸で	冷めぬこの熱は	あなたがくれた	覚えてるよ	朝 泣いたあの日も	おしゃべり 怒られた	絶えぬ	恋も知って	時に夢中な	よく遊んだね	机も椅子も 週末には	向かい合えない	教室のドア

6 2	6 1	6 0	5 9	5 8	5 7	5 6	5 5	5 4	5 3	5 2	5 1	5 0	4 9	4 8	4 7
<p>広島・福屋前</p> <p>広島・平和記念公園</p> <p>広島・原爆ドーム</p> <p>広島・厳島神社</p>										<p>熊本・水前寺公園</p> <p>熊本・鶴屋百貨店前</p>					
<p>いつのまにか</p> <p>時は流れ もう今日は</p> <p>卒業の日 人はいつか旅</p> <p>立つものだけど いつの日にか またどこかで 会える気が</p> <p>するからね 輝く</p> <p>日々を忘れ</p> <p>ないで 今始まる 希望の道 今日まで</p>										<p>（間奏）</p> <p>はかない調べが降り積もる</p> <p>た仲間たちには</p> <p>別れの歌を あふれ出す涙こらえて 旅立ちを決め</p> <p>つぼみから花咲かせよう 耳元で聞こえる</p> <p>はるかな年月経て</p> <p>告げ 今新たな 扉開き</p>					

9 9	9 8	
2 1		7 7 7 6 6 6 6 6 6 6 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3
<p>居酒屋（夜） INする一同のグラス。 アイを中心に、社長、石田、 中井、瀬尾、泉がささやか なパーティーを開いてい</p>	<p>（欠番）</p>	<p>山口・JR下関駅前 山口・唐戸市場 山口・下関海峡祭り</p>
<p>社長（背） 「アイは随分元気になったね。 一回り大きくなったみたいだ。」</p> <p>一同（OFF） 「カンパニー！」</p>		<p>ありがとうね 思い出の校舎と別れを 告げ 今新たな 扉開き はるかな年月 経て つぼみから花 咲かせよう つぼみから花 咲かせよう</p>

		9 9
	4	3
<p>瀬尾、石田、おどけてグラ げてみせる。</p> <p>石田、わざとらしく、しよ げてみせる。</p> <p>瀬尾、石田、おどけてグラ</p>	<p>社長、目線、アイから とりのの泉へ。 ラスト、男性陣に向けて 情けなさそうに</p> <p>石田、わざとらしく、しよ げてみせる。</p> <p>瀬尾、石田、おどけてグラ</p>	<p>る。</p> <p>社長なめアイ、 グラスを手にしたまま</p> <p>アイ、壁に背を預けて</p>
<p>瀬尾</p> <p>「俺達</p>	<p>社長</p> <p>「地方回りをしながら、アイは高3へ、 泉は大学卒業と女性陣はえらかったな。 それにひきかえ男性陣は―。」</p> <p>石田</p> <p>「面目ございません。」</p>	<p>アイ</p> <p>「いろんな名所にも行けたし、 熱心に私の歌を聞いてくれる人達にも会えて 感激でした。 夜も曲づくりと学校のレポートで 結構忙しかったですね。」</p>

			9 9
7	6	5	
<p>と石田。</p> <p>がつくりとうなだれる瀬尾に、</p> <p>間髪いれずに入る社長の声</p> <p>に、</p> <p>瀬尾、しきりに頷く。</p> <p>2人、座り動作。</p>	<p>いる。</p> <p>泉、ニコニコと聞いて</p> <p>すまなさそうなアイ。</p> <p>と苦笑い。</p> <p>社長、仕様のない奴らだな</p>	<p>井。バカやってる2人へ</p> <p>がつくりとそっくり返る中</p> <p>ス合わせる。</p>	
<p>社長</p> <p>「簡単な原理だろ。」</p> <p>「ばかやろうと賢い奴の違いだろう。」</p>	<p>石田 (OFF) 「それにしても泉は何で卒業できたの？」</p> <p>←</p> <p>(ON) 俺たちと同じ生活してたのに。」</p>	<p>社長</p> <p>「…。」</p> <p>アイ</p> <p>「…。」</p>	<p>中井</p> <p>「瀬尾は二年留年だろ。」</p> <p>「一緒にしないでくれよ。」</p> <p>留年3兄弟！」</p>

					9 9
					8
	1 2	1 1	1 0	9	<p>泉、微笑んで 社長、心配そうに</p> <p>瀬尾、気楽な感じでにこやかに</p> <p>泉、しれっとつつこみ入れる感じで</p> <p>強がる瀬尾。 グイッとビールをあおる。 社長、なおも心配そうに、 瀬尾から中井と石田へ 目を向けて</p> <p>中井、落ち着いた様子で 対する石田、ぐでぐと 脱力。</p>
	石田	中井	社長	瀬尾	泉
	<p>「俺んどこ、田舎だろう。」</p> <p>東京へ行ってお前遊びまくってるんだらうって</p>	<p>大丈夫でした。」</p>	<p>「中井と石田は大丈夫か？」</p>	<p>「あれはさあ、俺の方がふったんだぜ。」</p>	<p>「3人とも要領が悪かったのよ。」</p> <p>「家の方とか、問題はなかったのか。」</p> <p>「ウチは大丈夫ですよ。」</p> <p>「サラリーマンにだけはなるなって 家系ですから。何年留年しても問題なしです。」</p> <p>「でも瀬尾くん。」</p> <p>彼女にふられちゃったじゃない。」</p>

	9 9
<p>1 5</p> <p>1 4</p> <p>1 3</p> <p>パッと表情変えてにこやかに。一同へ</p> <p>アイ、本当に申し訳なさそうに</p> <p>瀬尾、そんなアイを元気づけるように</p> <p>大仰にポーズとって</p> <p>石田、ぼそりと突っ込みをいれる。</p> <p>返す瀬尾。</p> <p>コント風なノリになってる。</p> <p>そんなやりとりにいくらか</p>	<p>怒られたよ。</p> <p>でも、すっかり自分の気持ちを伝えたら、最後は、頑張れって。」</p> <p>アイ</p> <p>「ごめんなさい。</p> <p>みんな私のサポートの為に留年しちゃって。」</p> <p>瀬尾（背）</p> <p>「アイちゃん、そう考えちゃダメよ。」</p> <p>石田</p> <p>「うんうん！」</p> <p>瀬尾（背）</p> <p>「俺たちは今や株式会社MIRAIの社員として、会社の礎を築く為にアイを売り出そうとしてるのよ。」</p> <p>石田</p> <p>「会社のイシズエ？</p> <p>瀬尾もたまにはいいことを言う。」</p> <p>瀬尾</p> <p>「たまにはじゃねえよ。」</p> <p>石田</p> <p>「へっ、このやろう、このっ。」</p>

						99
21	20		19	18	17	16
喜ぶ一同	数瞬の間あつて、	社長、グイッと顔上げて	グイッとビール飲む。	間あつて	グイッとビール飲む。	社長あえて重々しい雰囲気
石田・瀬尾	一同	社長	社長	社長	社長	社長
「やった〜!!」	「…。」	「今月から給料を出すことにした。」	「みんなの頑張りでCDはよく売れてるし、ライブハウスや大学祭のコンサートの話もかなり来ている。そこでだ!」	「みんなの頑張りでCDはよく売れてるし、ライブハウスや大学祭のコンサートの話もかなり来ている。そこでだ!」	「その会社のことだけだな…。」	

9 9	2 2	<p>石田、瀬尾、バカ丸出しな 感 社 意 大 メ 石 瀬 社 一</p>	<p>一 社 社 石 社</p> <p>「…！」</p> <p>「それから、ホールコンサート、正式に8月20日と決まった。この日は、母さんの命日だ。これを何としても成功させる。」</p> <p>「明日から準備の方、本格的に始まります。」</p> <p>「景気の回復も時間の問題だろう。それにブロードバンドが本格的に普及する。そうになると人の心を明るくし感動を与えるような良質のコンテンツが必要になる。」</p>
2 5	2 4	2 3	2 2

99	100
26	3 2 1
<p>熱心に語る社長</p> <p>一同（石田以外）大きく頷くと</p> <p>石田、いつものつつこみで項垂れてみせる。</p> <p>（クレヨンしんちゃん風）</p>	<p>渋谷駅前</p> <p>拍手の音に飛び立つ鳩。</p> <p>大勢の人が拍手をしている。</p> <p>拍手を受けてお辞儀をするアイ。アイの横で見守る泉。</p>
<p>音楽、映画、アニメ、キャラクター、……。つまり総合的なエンターテインメント事業の可能性が広がっているということだ。</p> <p>コンサートを成功させた後、俺たちはその道に進んでいくんだ。」</p>	<p>石田（背） 「社長の言うことはいつも大きい。」</p> <p>＜SE 拍手＞</p> <p>観客（OFF） 「アイちゃん！アイちゃん！」</p>

				100
	7	6	5	4
	<p>で散会するファンたち。</p> <p>仕方ないなあといった感じで</p> <p>泉。</p> <p>ファンの解散を呼びかける</p> <p>さそうに解散の誘導。</p> <p>客へ声をかける。申し訳な</p> <p>泉IN、!!と頷いて、観</p> <p>中井は泉に声をかける。</p> <p>警官へ話をする石田。</p> <p>歩いてくる警官IN。</p> <p>とらえて</p> <p>石田、視界の端に警官を</p>	<p>石田</p> <p>「…！」</p>	<p>アイ、泉と目を合わせて</p> <p>にこり。</p> <p>拍手を送る中井と石田。</p> <p>2人も見合って頷く。</p>	

104	103	102	101	
		3 2 1	4 3 2 1	8
(欠番)	(欠番)	(欠番) 歌っているアイ。 スタジオ内。	学生達に向って熱心に説明 学生達。 作よりOUT。 いる瀬尾。書き終わりの動 ホワイトボードに記入して	2人に注意。 険しい表情の警官。 中井もすまなそうに。 拌み倒している石田。
			石田(OFF)「次に開場時間についてです。 リハの状況によって	
			(ON) 多少の変更はあるかもしれませんが、 基本的にはこの線で行きます。」 (こぼし)	

						109	108	107	106	105
6	5	4	3	2	1					
<p>少し離れた場所に泉。</p> <p>石田と瀬尾。</p> <p>床で寝ている中井、</p> <p>がこぼれている。</p> <p>ブラインドの隙間から朝日がこぼれている。</p> <p>わった缶ジュースなど。</p> <p>わったカップ麺や飲み終</p> <p>雑然と置かれている食べ終</p> <p>いる。</p> <p>合わせでの内容が書かれて</p> <p>ホワイトボードには、打ち</p> <p>朝を迎えたが薄暗い事務所</p>						(欠番)	(欠番)	(欠番)	(欠番)	
<p>へSE かすかに聞こえてくる鳥の鳴き声</p>										

1 1 1	1 1 0	
2 1	3 2 1	
<p>放送局前から事務所への道 (真夏・夕方)</p> <p>セミが鳴き、 台車を押す一同。</p>	<p>渋谷のブティック(昼)</p> <p>服を見ているアイと泉。 泉、アイに服をあてがって みている。 アイ、ちよつと照れた 感じで</p>	<p>隣には手持ちプレートが立 てかけて置いてある。</p>
<p>中井(OFF)「今日の売れゆきは どうだったの。」</p> <p>アイ 「CDは70枚ぐらい売れましたよ。 チケットは…。」</p>		

1 1 3	1 1 2					1 1 1	
1		6	5	4	3		
	(欠番)	<p>後ろ姿。</p> <p>トボトボと帰る一同の</p> <p>うと</p> <p>中井の分析に、何とかしよ</p> <p>うと</p> <p>額に汗のアイ</p> <p>石田、泉も汗をうかべて</p> <p>ハンカチでぬぐう。</p> <p>アイ、暑そうに額の汗を</p> <p>冷静に分析する中井。</p>					
		<p>石田 (背)</p> <p>「あと、お台場もありね。」</p>	<p>アイ (ON)</p> <p>「私、どこか別の場所で 路上ライブやりましょうか。」</p>	<p>中井 (OFF)</p> <p>「残念ながら知名度がないんで、 路上聞いた人からの広がりがないんだよ。」</p>	<p>石田</p> <p>「歌を聞いてくれた人は かなり買ってくれるけどなあ。」</p>	<p>中井</p> <p>「ちよつと落ちてきたか。 全部で800くらいかあ。」</p>	<p>泉</p> <p>「チケットは50ぐらいかなあ。」</p>

	1 1 6	1 1 4	1 1 5	
2	1	3 2 1	2 3 1	4 3 2
	重ねる (女子大生①、②の台詞 重ねる)	同、聞いている人々。 歌うアイ お台場(昼)	見ている人々。 演奏しているアイ。 けやき坂。 六本木ヒルズ	(欠番) 弾き語りするアイ。 アイコンサートの看板を 持つ学生。
(OFF)	女子大生①(ON) 「はい、アイファーストライブ事務局です。 ← はい、はい、ええ…。	女子大生②(OFF) 「…はい、当日券もあります。 …:はい、よろしくお願いします。」		

						1 1 6
	7	6	5		4	3
	決意の表情で前に出て	中井	真顔で頷く瀬尾	真剣に聞いている石田と泉	一同に向って イスに背をあずけて 厳しい表情で 社長、眉間に皺を寄せて	一同、かなり疲れた様子。 無精髭によれた服。 疲れた風の石田。ペットボ トルの水を口に運びつつ
	そして聞いてくれるお客さんとの気持ち	明日はアイと俺たち、 疲れもピークだろう。しかし、あと一日だ。	相当に無理を重ねてきた。	「アイもみんなもこの間、 相当に無理を重ねてきた。」	「こうなったら明日、当日の勝負だ。 渋谷駅の各改札とセンター街、 そして原宿には最後まで案内を立てる。」	「はい、わかりました。」 「石田、前売りは結局どうなった？」 「新たなライブで伸びたんですが、 1300枚とちょっとです。」 「すいません、目標までは届きませんでした。」

118	117	116
1	3 2 1	9 8
ホール内ステージ下 アイの姿。しやがむ。	(8月20日・夕方) 渋谷音楽ホールの時計。 音楽ホール。 ホール内。瀬尾と石田。	社長、一同へ元氣付けるよ うに 社長の言葉を受けて活氣 付く一同。
	瀬尾 (OFF) 瀬尾 瀬尾	(ON) 石田 中井 瀬尾 泉
	「外の人数増えてきてます。」 ← 「各パートとも準備いいですか。 自分の持ち場をしっかりと 守って下さい!」	← 最高に通じ合えるコンサートにしよう! 「ヨシッ!」 「やりましょう。」 「やりましょう。」 「ええ。」

119						
1	5	4	3	2		
渋谷駅前、ハチ公前交差点 脇（18時15分） 看板とメガホンを手に呼び かける学生。		イスに置いた父母の遺影を 前にしているアイ。 父母の遺影 必死にこらえていたアイの 目から大粒の涙がこぼれ る。 肩を震わせながら、 声に見上げるアイ			アイ（OFF） 「母さん、やっと今日を迎えられたよ。」	アイ 「約束だよ。私、頑張るから、 この席から応援してね。」
学生1 「渋谷の天使、アイコンサート、 渋谷音楽ホール、」		アイ 「うん。」	泉 「もうすぐ開場だよ。今日は頑張ろうね。」	アイ 「あっ…。」	泉（OFF） 「アイちゃん、」	

1 2 1	1 2 0	
2 1	3 2 1	2
<p>ホール内（同時刻） 館内は70%ぐらいの客。 客電100% センターのミキサーなめ</p>	<p>事務所で電話の応対をして いる女子大生。</p>	<p>呼びかける2人の学生</p>
<p>観客（OFF） 「こっちこっち。」 観客（OFF） 「あーごめんごめん。」</p>	<p>女子大生①（背）「はい、大丈夫です。チケットはお持ちですか。 あー、直接音楽ホールの方で 扱っているんですが……はい、はい……。」 女子大生②（ON）「今どちらです？ あーちよっと 始まっちゃうかも知れませんか。 ← （OFF） 受付で話して下さい……。」「</p>	<p>学生2 本日午後6時30分開演！ 「アイのファーストコンサート 間もなく開演です。当日券ありますよ。 音楽ホールに急いでください。」</p>

1 2 3	1 2 2	
2 1	2 1	3
<p>館長室（18時25分頃） 場内を写すモニターテレビ 80%の入り。 心配げに見ている館長。</p>	<p>同時刻。ホール入口付近。 落ち着かない様子の石田と 社長。 外を見て 石田、不安げに 社長、落胆の表情。</p>	<p>席につく人々。 遺影の後ろ、前の2列目に 路上の常連の人達が座って いる。</p>
	<p>石田 「おかしいです。ちょっと少ないです。」 社長（背） 「前売りの分もまだ入っていないだろう。」 石田 「見た感じでは結構入ってるんですが。」 社長 「ダメだ。到底満員にはならないよ。」</p>	<p>観客 「いよいよだね。」 観客 「ねー。楽しみね。」</p>

1 2 4	1 2 4	3	3
<p>そこへ携帯が鳴る。</p> <p>頷く石田。</p> <p>が、すぐ結論を出して しばし考える社長。</p> <p>視線を石田に向けず、 心配そうな石田。 手前の人 I N · O U T。</p>	<p>上の時計を見る。</p> <p>開演時間が迫っている。 俯く館長。</p>	<p>スタッフ (OFF) 「チケットよろしいですか？」</p> <p>スタッフ (OFF) 「入り口でチケットを提示してください。」</p> <p>石田 「社長、開演時間もうすぐですが、 どうしましょう。」</p> <p>社長 「遅らせてもそんなには増えないだろう。 仕方ない。予定通りに行くしかないな。」</p> <p>石田 「分かりました。」</p> <p>ASE 携帯の音▽</p> <p>石田 「はい、石田。おーそうか。 どンドンこっちへ向かってるんだな。」</p>	<p>館長 (OFF) 「うーん…。」</p>

1 2 5	
1	6 5 4
<p>公園通り・パルコ前 (18時30分)</p> <p>「アイコンサート」の看板 を持った男が叫んでいる。 急ぎ足で(小走りの人もい る)歩いてくる人の群。</p>	<p>電話を切った石田、 表情明るくなって社長に 同じく社長も表情明るく なって</p> <p>頷く石田。インカムの スイッチを入れて、各パー トへ連絡をしている。 社長、外に目をやる。</p>
<p>男(ON)</p> <p>「お急ぎください。間もなく開演ですよ。 チケットのない人は、 ←</p>	<p>石田</p> <p>「当日案内のメンバーからです。 客がどんどんこっちに向かっているって…。」</p> <p>社長</p> <p>「そうか！よし。開演を15分遅らせよう。」</p> <p>石田</p> <p>「はい、わかりました。 おい、瀬尾！中井！」</p>

		1 2 6	
	3	2	1
	3	2	3
	石田。 キョトンとした表情の 愛想で挨拶はしているが、 息子遅れてIN。 お辞儀する警官。 息子遅れてIN。 たところで気づく石田。 その間に警官IN。終わっ たところへ気づく石田。 話している石田。 入口へ向う人の流れの中、 外に出て、誘導をしている 石田。インカムに連絡入っ たようで聞いている。 （18時40分） ホール、入口付近。	私服の警官と息子。	
	石田	石田	石田
	「どうも。」	「わかりました。はい。」	「間もなく開演です。」
			男（OFF） 「お急ぎください。もうすぐ開演ですよ。」 （OFF） 受付で当日券をお願いします。」

1 2 6	6 5 4	<p>辺りに目を向けている息子 I N。 ？と2人を見る石田。 そっぽ向いたままの子供 警官へP A N。 警官、敬礼して見せると 警官姿がW X Pで重なる。 ！！と気づく石田、 石田、姿勢正して。 息子はそっぽ向いて周りを 見ている。 お辞儀する石田。 ニコニコと息子を紹介する 警官。石田照れ気味に。 警官、挨拶をしない息子の 背をたたいて促す。</p>	<p>警官 「ああ、うちの息子なんですよ。」</p> <p>石田 「あーっ！」</p>
-------------	-------	--	---

1 2 7 A	1 2 6
1	8 7
<p>ホール客席 満員の客席。 場内が暗くなる。 ピアノが流れる。</p>	<p>息子、面倒くさそうに ちよこんと頭下げる。 2人を入口へ案内する 石田。 息子関心薄げに遅れてついでゆく。 渋谷に入っていく人々。</p>
<p>泉（OFF） 「渋谷の雑踏に歌手をめざして 一人の少女が舞い降りました。 一年六ヶ月を経て、 今、少女はあこがれだった</p>	<p>警官 「おい、きちんと挨拶しろ。」 石田 「あ…どうぞ。」</p>

						1 2 7 A
	7	6	5	4	3	2
	アイ笑顔	客席より、ステージのアイ へPAN	常連のファン	拍手終わるの待って台詞	同、UP	スポットライト点灯。 立っているアイ。 ゆっくりお辞儀して マイクを口元へ。
	アイ	アイ	アイ(OFF)	観客(OFF)	観客(OFF)	観客(OFF)
	「一所懸命歌います。」	「お集まりいただきまして、有難うございます。」	「今日はいつも路上で応援してくれるみんなを始め、	「アイちゃん。」	「がんばってー。」	「アイちゃん。」
	「12個の季節〜4度目の春〜」					

1 2 8	1 2 7 C						1 2 7 B	
			1 5	1 4	1 3	1 2	1 1	1 0
由利音楽教室	(欠番)					ピアノ演奏。		
						もう一度 青春 校舎で 笑い合った日々と約束を 一瞬 永遠 未来と 残されている今日の日 黒板 白いチョークで 二つの イニシャル並べた 疑われた翌朝君は 僕のせいだと気づいてた？		

				1 2 8
	4	3	2	1
				(福岡 19時00分) 小学高学年と中一ぐらいの女の子3人がレッスンで来ている。 先生が1人の子のボイストレーニングをしている。 席に戻るこども③ 先生、生徒が席に着くのを見つつ、一步来てみんなへ こども①
由利先生	こども② (背)	由利先生	こども①	由利先生
「うくん、高校三年生やけん、17歳かな。」	「先生、その人何歳ぐらいの人？」	「アイちゃんがね、今頃東京の大きなホールでね、コンサートしようよ。」	「この教室の生徒やった人やろ。名前は聞いたことあるっちゃんね。」	「あ、あ、あ、この音ね。もっとお腹から声出さんと。はい、吉田さん、席に戻って。」
		由利先生	こども③ (背)	「はい。」
		由利先生	こども①	「あなたたちは直接アイちゃんは知らんとよね。」

1 3 2	1 3 1	1 3 0	1 2 8
1		1	6 5
竹下通りの全景	(欠番)	渋谷駅前 ハチ公前交差点(同時刻) 2人の学生が案内ボードの 片づけをしながら、ホール の方へ駆けてゆく。	アイの席を指す先生。こども もたち、見る。 アイがすわっていた席
女①(OFF)「アイって誰？」		学生① 「よかったなあ、ホール満員らしいよ。」 学生② 「急ごう、ステージのアイちゃん早く見たいよ。」	こども③(背) 「その人、レッスンも上手やったと？」 由利先生(ON) 「うん、ものすごく上手やったよ。」 いつもその端の席 ← (OFF) に座とった。小さい頃は一日中 ← (ON) この教室におったこともあったとよ。」 こども①②③ 「へえー。」

1 2 9	1 3 5	1 3 4		1 3 3	
1			3 2	1	2
(欠番)	(欠番)	(欠番)	女子大生②も奥で話している。		看板を手に、駅に戻る学生たち 後ろの会話を耳にして にっこり。
				女子大生① (OFF) 「はい、 ← (ON) 駅前は片付けて、もう戻ってきます。 私達は電話が入るんで、 この事務所に残ります。」	女② (OFF) 「知らない。」 女③ (OFF) 「この前、歌っていた人かも…。ハチ公で。」 女① (OFF) 「渋谷でコンサートやるんだ。すごっ。」 女② (OFF) 「へえ。」

	1 3 6		
	2	1	3 2
モニターのアイを見る社長	館長室（同時刻） 館内モニターでアイが映っている。 （時雨を歌っている） 頭を下げる社長 館長、手を振って	調整室の瀬尾 瀬尾UP。くぐもった声で	
社長 「アイはそんなまっ直ぐなところが	社長 館長 「いろいろとお世話をおかけしまして…。」 「いやいや。アイさんと皆さんの熱意ですよ。 私も長く館長やってますが、 直接歌手本人が交渉にきたのは はじめてですもんねえ。」	（ON） ← 早め早めに用意して。」	^ B G M 『時雨』 v 瀬尾（背） 「スタッフルームの人、 指示した通り、曲に合わせて使うもの、

1 4 2	1 4 1	1 4 0	1 3 9	1 3 8	1 3 7	1 3 6
1						3
しゃべりだすアイ。 アイUP。小さく息を吸う。 マイクIN。	(欠番)	(欠番)	(欠番)	(欠番)	(欠番)	館長も見て 社長 2人、モニターのアイを 見つめる。
アイ 「実は今日、						ある娘なんです。」 館長 「それでですかねえ。詩がいいですよねえ。 曲もその詩にぴったりだし。 私の年代でも心にしみ渡りますねえ。」 社長 「有難うございます。」

										1 4 2
1 1	1 0	9	8	7	6		5	4	3	2
<p>話を聞いている石田と社長</p> <p>途切れるアイの言葉</p> <p>アイの声が聞こえる。</p> <p>スタッフたちのインカムに</p> <p>スイッチをONに。</p> <p>スイッチをONにするよう促す。</p> <p>技術の人に声をかけられて</p> <p>技術の人、瀬尾にインカムのスイッチをONにするよう促す。</p> <p>ステージそでの中井と泉。</p> <p>見ている瀬尾。</p>										
<p>アイ(OFF) 「二年前のことです。」</p> <p>みなさんにお話しすることがあります。</p> <p>今日の日を誰よりも楽しみにしていた</p> <p>母さんが、亡くなってしまいました。」</p> <p>ASE ジジ…v</p> <p>アイ(OFF) 「歌が好きだった私は、</p> <p>母さんに誉められることがうれしくて…</p> <p>←</p>										

	1 4 3		1 4 2
2	1	1 8	1 7 1 6 1 5 1 4 1 3 1 2
？と少し乗り出すアイ	回想 アイと母さん、小さなテ ブルをはさんで 同UP。つらそうに。	アイ、天井を見上げる	館長 会場内の客 会場外スタッフ 会場外スタッフ
アイ	母 「アイ、そのうちわかることやけん、今日話すね。 しっかり聞くとよ。 実はね、アイ、あんたは母さんが お腹をいためた子やないと。」 「えっ、母さん、何言いようと？」	卒業式の日の夜のことでした。」 ←	(背) …それだけのために ← (OFF) 歌手を目指したのです。」 アイ(OFF)「10歳の時に父さんが亡くなり、 女手一つで体を壊しながら 私を育ててくれた母さん。」 アイ 「その母さんから話すことがある、 と言われたのは小学6年の ←

								1 4 3
1 0	9	8	7	6	5	4	3	
泣いているアイ	寝ているアイ	笑うアイ	泣いているアイ	同	施設	じわじわと涙を浮かべる アイ。	母さん、アイを見て諭すよ うに	
アイ 「母さん……」	「この子は、私達の子オやつて。神様が私達に授けてくれた子オやつて。」	「父さんと母さんは最初に決めたよ。」	「恥ずかしそうにして笑いよった。」	「ばってん母さんたちが行くとね、一番小さくて…、人見知りですーぐ泣く子やった。」	母（OFF）「父さんと初めて行った時、そこに三歳になったばっかしのあんたがおった。」	アイ 「母さん…。」	母（背） 「母さんは、赤ちゃんば産めん身体になつてね。悩んだ末に、ある養護施設に、里親の相談に行つたと。」	

1 4 4 A	1 4 3
3 2 1	1 1
天井のライト。	<p>泣くアイを抱きしめる母</p> <p>俯いて 肩をふるわせて 母の手I N。そっと手をおく。</p>
<p>アイ（ON）</p> <p>「小学校を終えたばかりの私にとって、 ショックな話でした。 心が張りさけそうになりながら、 私は母さんの言葉を聞いていました。」</p>	<p>母（OFF）「あんたは私達の宝物（タカラモン）やった。 血はつながつたらんけど、どげな親子より 心の深い絆で、結ばれとーと。」</p> <p>母</p> <p>「父さんが亡くなつてから、 商売の方も大変やけど…、 母さん頑張るけん、 今までとおなし気持ちで、 アイは歌手を目指すとよ。 母さんとアイの二人の夢なんやけん！」</p> <p>私…。」</p>

						1 4 4 A
						4
						涙しながら聞いている客。
						←
						(OFF) でもこの事実は受け入れざるを得ない ものでした。」
						←
						アイ(背) 「後でわかったことですが、私の生みの母は、 たった一人で私を生み落とした後、
						←
						(OFF) 体を悪くし、
						←
						アイ(背) 24歳の若さでこの世を去ったそうです。」
						アイ 「私はこの話の後、施設にいたことは 絶対に誰にも言うまいと心に決めました。」
						←
						涙する泉と中井。
						←
						続けるアイ。
						←
						ステージのアイ。
						←
						涙する社長。
						←
						石田もメガネを上げつつ、
						←
						しきりに涙をぬぐう。
						←
						だらしなくくらいに
						←
						アイ(OFF) 「私を支えてくれているスタッフの みんなにもー。」

								1 4 4 A
1 7	1 6	1 5	1 4	1 3	1 2		1 1	1 0
	メガネをとり涙する館長。	渋谷のにぎわい。		常連客だった人達。	警官と息子。 涙ぐむ警官。		泣いている瀬尾。 上を向く。	泣く石田。 社長、軽く咳払いでこらえる風。
	← 私 私は曲を作り歌うことで、	← アイ (OFF) 豊かな社会といわれる日本に3万人もいる。 世界には数え切れない子どもたちが…。		← アイ (OFF) 「私と同じような境遇の子が 何もないんだって。」	← (OFF) 真直ぐに生きていくことに 恥ずべきことなんて		← アイ (ON) 自分の間違いに気づきました。	← アイ (ON) 「でも私は

				1 4 4 A
2 1		2 0	1 9	1 8
		唇をふるわせて涙をこらえるアイ。こぼれそうになる涙、上を向く。 決意を固めて、まっすぐ見る。	泣くのをこらえ、何とか言ってる感じ。 そつと目を閉じ… 深呼吸…	ライトの中のアイ。
	アイ アイ アイ (OFF)	「今日の最後の歌です。亡くなった母さんへの 思いをつづったものです。」	(ON) 一歩を踏み出そうってメッセージを送りたい。」	(背) ← 困難な境遇にいる子ども達に、夢を持とう、 ←
	「この歌を、今日最前列で応援してくれた 母さんと父さんの魂に捧げます。そして、			

				1 4 4 B						
5	4	3	2	1	2 7	2 6	2 5	2 4	2 3	2 2
				ギター の演奏。		深く 一礼 をする アイ。				
				この場所から歩き出す 通りはまばらな夕暮れ 誰もいない立ち止まらない そっとマイクをにぎったよ やっぱりこの道一人 歩くの少し不安だよ	アイ 「ありがとう」	(ON) 心を込めてこの歌を捧げます。	← スタッフのみんなにも、	本当の家族以上に私に接してくれている	路上で私を応援してくれたみんな、	寒い日も暑い日も

									1 4 4 B
1 5	1 4	1 3	1 2	1 1	1 0	9	8	7	6
<p>電話して弱音はいて ちよつと泣きついたりして だけどあなたはもういない いつも笑顔で励まされてた あの日着てた洋服抱いて なつかしい香りに涙 大空 まではばたきたい あなたをのせてこのまま翼広げたい 後戻りはできないけど それならいつそ私も消えてしまいたいよ どうか私を置いていかないで もう一度だけ戻ってきてよ 「会いたい」</p> <p>人と人が巡り会うことって奇跡なんだよね</p>									

									1 4 4 B	
	2 3	2 2	2 1 B	2 1 A	2 0	1 9	1 8	1 7	1 6	
			ドラム（背）の演奏。	父・母の遺影。	観客たち。	同、泉と中井。	同、館長。	涙する石田と社長。	まだ涙目。	涙をぬぐう瀬尾。 ステージを見る。
夢の中でしか	ほんの一言でいい言葉がほしい	本当は悔しいんだ	昔のことみたい	ずっと	時々見る二人の写真	冷たい	とてもとても	くるまったふとんが	眠れない夜	自分だけじゃ歩けない 眠れない夜

								1 4 4 B	
3 2	3 1		3 0	2 9	2 8	2 7	2 6	2 5	2 4
ピアニストの間奏。									
<p> 会えない どんなに願っていても側にはいないから 二人で約束した今日の日 今こそ願いは叶った ほら 「歌うよ」 これからもね ずっとずっと あなたは たった一人私の中で 忘れ ないよ 忘れないよ あふれ出す 思い出に涙止まらない 遠い 空の もっと高い </p>									

1 4 8	1 4 4 B
	3 8 3 7 3 6 3 5 3 4 3 3
この日のコンサートの模様 (文字打ち出し)	ピアノ。
	<p>星になっていつも見守っていて 精一杯生きてみせる 今以上に強くなる きつとなってみせる 最後に 伝えたい言葉がある 言えずに今日まで歩いてきた 「…ありがとう」</p> <p>観客 (OFF) 「アイちゃん。」 観客 (OFF) 「ありがとう。」 観客 (OFF) 「サイコー!!!」 観客 (OFF) 「サイコー!!!」 観客 (OFF) 「アイちゃん!」 観客 (OFF) 「ありがとう。」</p>

を伝えるホームページには、一日で100万件を超えるアクセスがあった。

メールも各地から多数寄せられた。その中に、次のようなものがあつた。

「いつも注意してごめんですね。立場上つらかったけど、君の頑張りとは若者達の熱心さにはいつも感心していたんだ。

今日は息子を連れて行ったんだ。日頃会話もなかったけど、君のことを知っていたんでちょっと見直されたよ。

	148
	<p>いろいろごめんね。 これからも心の中で応援して るから・・・</p> <p>今日のコンサート、君たち と観客の心がひとつになっ て、どんなシンフォニーよ りもすばらしかったよ。</p> <p>駅前交番の巡査より」</p>
<p>エンディング曲『大丈夫だよ』</p> <p>春の木漏れ日がほら つぼみ照らしている 頑張りすぎる君に 僕は伝えたいよ まちがいだらけでいいさ 泣いちゃってもいい 転んですりむいた時に見上げる空忘れないで 大丈夫だよ 心配ないよ 自分らしさはつくっていけばいい 向かい風は強い方がいい 強く立つこと教えてくれる</p>	

君は君のままに

過去を消す消しゴムは誰も持っていないよ

未来を描くペンはきつとここ(心)にあるさ

夢に近道あればどうか教えてよ

絶対その道は通りたくないから 君もそうでしょ

大丈夫だよ なんとかなるよ

途中下車も時にはしてもいいから

生きる道にノルマはないよ あるのはいつも少しの壁

君が大空ゆくなら 僕は大地をゆくから

もしも疲れた時は僕が大きな岩になろう

大丈夫だよ 無理はしないで

君は誰より頑張っているからね

夢を少しちぎってみたら大事なことが見えてくるのさ

君は君のままに

